

遊牧民の離合集散と世話のやける家畜たち

— モンゴル国アルハンガイ県におけるヒツジ・ヤギの日帰り放牧をめぐる
労働の組織化と群れ管理 —

風 戸 真 理*

The Flexibility of Pastoralists' Social Groupings and the Difficulty of Herding: Labor Organization and Herd Control for Day-trip Herding of Sheep and Goats in Arkhangai Province, Mongolia

KAZATO Mari*

Day-trip herding is one aspect of the person-animal interactions that form the basis of the domestication process. This study examines the influence of socio-economic factors on subsistence techniques and the variation of person-animal relationships among pastoralist societies.

Domestic sheep and goats are herded together as one herd in Arkhangai Province, Mongolia. I observed that the herds frequently mingled with each other when they came in proximity during day-trip herding, and herdsmen intervened in their herds repeatedly throughout day-trip herding. However, previous studies conducted in Africa have suggested that herds with fixed membership did not mingle and they moved autonomously with little intervention by herdsmen.

The distinctive behavior of herds and techniques used by herdsmen to intervene in herds to control their activity in Mongolia appeared to stem from a combination of such factors such as the social organization involved in animal management, folk knowledge of animal behavior, and the influences of the natural environment. Concerning the social organization, several households formed a temporary residential group and combined their animals in a single herd to share the work of day-trip herding. However, the composition of residential groups changed in a few weeks or months and the membership of herds also changed in the short term. Indeed, the herds mingled frequently, unless herdsmen intervened to integrate, lead and control the activities of animals. The day-trip herding of such herds was only possible with frequent intervention by herdsmen.

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University, 日本学術振興会特別研究員 JSPS fellow
2004 年 7 月 22 日受付, 2006 年 2 月 21 日受理

1. はじめに

牧畜は、家畜を基本的な財とする人々が生活のさまざまな面で乳・肉・毛皮といった畜産物に依存する生業様式である。遊牧とは、牧畜を生業とする人々が、家畜の採食圧や環境の変化に対応しながら草地を利用するために、ある地理的範囲内で常態的に居所を移すという遊動的な居住様式をとっている側面に着目した概念である。牧畜民が家畜を維持し、安定して畜産物を得るための基本的な技術として、放牧・搾乳・去勢がある [谷 1976: 32-35]。なかでも放牧は、群居性の草食動物を人間の居住地にとどめおきつつ、草地を利用して栄養摂取させることを可能にするシステムとして、家畜群の維持に関わる最も主要な技術である。

放牧技術についてはこれまで、ドメスティケーションの視点から、最古の群居性家畜であるヤギやヒツジの日帰り放牧を例にヨーロッパ・東アフリカ・西南アジアの牧畜社会で実証研究がおこなわれてきた。これらは、日帰り放牧中の家畜と牧童とのインタラクションのあり方や群れ内部の個体間関係を明らかにすることをとおして、家畜放牧群とはどのような集団であるのか、日帰り放牧はいかにして成立しているのかを議論してきた。そして、メンバーが基本的に長期間変わらない放牧群には、人間からの介入を毎日繰り返し受けることで身につけた、「家畜らしい」2つの行動特徴がみられることが指摘されてきた。

1 つめに家畜どうしの関係として、同じ家畜囲いに毎日入れられて一緒に夜を過ごす個体どうしや [波佐間 2002]、ひとつの放牧群として毎日日帰り放牧を共にする個体どうしは [太田 1982; 1995; Shikano 1984; 1990; 鹿野 1999]、放牧中にほかの群れと出会うことがあっても、特異的に自分の群れのなかまと相互に近接しあってまとまりを保ち、「輪郭」のある集団をなすということがある。とくに注目したいのは、昼間放牧されるときも夜に囲いに入れられるときも恒常的に同じメンバーシップで過ごす群れは、放牧地や井戸で出会ったほかの群れと接触したり合流しても自らもとの群れに分かれ、混ざりあうことがほとんどないと報告されてきたことである [太田 1982: 40-42; Shikano 1984: 67; 1990: 24; 谷 1997: 43]。

2 つめに人間との関係の面では、日帰り放牧には群れを導く役割を果たす人間である「牧童」が随伴するが、牧童が家畜の統率のために費やす時間の少なさが指摘されている [太田 1982: 36-37; Shikano 1990: 15; 鹿野 1999: 64-65; 波佐間 2002: 83]。それは、家畜が放牧のルートやリズムを学習して自律的に移動するようになるとともに [太田 1982: 46-51]、牧童の介入の意味をも学習してしまい [松井 1989: 178]、これに対する反応がパターン化されたものになった [鹿野 1999: 70-71] 結果と説明される。

これに対して風戸 [1999: 45-46] は、モンゴル国での調査から以上の結果とは異なる状況を報告している。すなわち、モンゴル¹⁾ ではヒツジとヤギは混成群としてまとめて放牧されるが (以下では、ヒツジとヤギの混成群を「ヒツジ・ヤギ」とよぶ)、放牧中のヒツジ・ヤギ放

牧群が別のヒツジ・ヤギ放牧群と頻繁に混ざりあうことが観察されるとともに、モンゴルの牧民たちは、混ざった群れは人間が介入しない限りもとどおりの状態に分かれることはないと考えていた。

家畜の行動は、放牧地の地形や植生のほか、群れの構成や頭数、群れを導く技術といった諸要素の影響を受けると考えられる。そして放牧をはじめとする牧畜の諸技術は、それぞれの牧畜社会に特有な文化や社会的状況の中で成立している。牧畜という生業様式はユーラシアからアフリカの乾燥地域に広くみられるが、牧畜諸社会のあり方が多様であるのと同時に、日帰り放牧中の家畜の行動および家畜と人間の関係も、社会の状況に応じて多様であると考えられる。それゆえ、これまで議論の中心だった狭義の放牧技術に加えて、特定の自然・社会環境の中で育まれた文化的な信念ともいえる放牧理念や群れの編成と労働力の組織のしかたといった文化・社会的な背景にも着目し、これらの総体としての放牧技術体系について検討する必要がある。

一般に牧畜民は複数種の家畜を飼育することによって、病気や環境変化に対するリスク回避を実現し [太田 1980: 65-66]、食料生産を安定させている [Dahl and Hjort 1976: 235-237]。また同じ種類でも性や成長度の異なる個体が維持されている。しかし種・性・成熟度が異なる個体は、歩く速さや食草の種類といった行動や生理の差異のために一緒に管理できないことがある。また、乳利用のために母と子を分離しておくといった、生産上の都合で一緒に管理できない個体もある。このため、家畜を種・性・成熟度によりいくつかのカテゴリーに分けて放牧群を編成する必要がある。ただし群れを細かく分けると、個々の群れを見張るための労働力もより多くいる。このため、放牧のために群れをどのように編成するかという問題は、労働力の配分という課題にも関わる。

20世紀以降のモンゴル牧畜社会では原則として、核家族が家畜と移動式天幕ゲル (*ger*) を所有し、いくつかの核家族が空間的に近接してゲルを建てて、家畜、とくにヒツジ・ヤギの群れを共同で放牧管理してきた [ヴリーランド 1962 (1957): 22-24; 後藤 1970: 126]。このような、複数の家族が一時的に形成する集団を本論では「居住集団」とよぶ。²⁾ 民主化 (1990年) 以降のモンゴルを扱った人類学的研究は、居住集団の成り立ちを主に構成員間の社会・経済関係の面から論じてきたが [Bold 1996; 尾崎 1997; 日野 2001]、そこでおこなわれる家畜の共同管理の具体的内容、とくに放牧技術、放牧に関わる労働と配分、またその季節変化については不明な点が多い。

1) 本論ではとくに断りのない限り、「モンゴル」という表現でモンゴル国を指すものとする。

2) モンゴルにおけるいくつかの家族が季節的に集まってゲルを建てる居住の単位は、日本語で宿营地集団 [小長谷 1996: 9; 日野 2001: 90] やホットアイル [尾崎 1997: 83-84] とよばれてきた。本論ではスニースにならない、これを地域的・時代的な文脈から自由な概念である居住集団 (*residential group*) [Sneath 1999a: 139] とよぶ。

そこで本論では、1990 年代後半のモンゴル国アルハンガイ県チョロート郡における複数種類の家畜に対する通年の放牧管理の実態をまず明らかにする。そしてなかでもヒツジ・ヤギの日帰り放牧がどのように成立しているのかを、群れ編成のあり方と群れをコントロールする技術の 2 側面から記述・分析する。そして、生業上の必要性だけではなく社会生活の広範な文脈の中で人々が群れの編成や労働力の組織のしかたを選択することが、放牧技術にどのような影響を与えているのかを検討することをとおして、放牧技術からみた人間一家畜関係の多様性について議論する。

2. 調 査 地

本論のもととなるデータは主にモンゴル国アルハンガイ県チョロート郡のバヤン・ハイルハン行政区で 1997 年 5～11 月、1998 年 2～4 月、1999 年 3～4 月の合計 240 日間に遊牧民宅に住み込み調査して得られたものである。³⁾ なお 1998 年 7 月に 20 日間トゥブ県バヤン・ツァーガン郡で、また 2001 年 6 月、8～9 月、2002 年 10 月の合計 57 日間、ドンドゴビ県デレン郡で補足的な調査をおこなった (図 1)。

アルハンガイ県チョロート郡は、首都ウランバートルから西へ約 630km、県都ツェツェルレクから約 130km 離れた約 4,000km² の行政領域である。この地域はハンガイ山中の海拔 1,700～2,040m の高地に位置し、地形は山がちであり、面積の 82%を草原が、14%をカラマツなどの森林が占める [Arkhangai Aimagiin Chuluut Sum 1993: 1]。郡内にはセレンゲ河の支流であるチョロート川、ハノイ川など 4 河川が流れ、湧泉由来の幾筋もの小川がこれらに合流する。年間の気温較差は大きく、最も寒い 1 月の平均気温は -20℃であり、最も暖かい 7 月の平均気温は 15℃を超える。年平均降水量は約 400mm で夏に集中する [Ulsyn Geodezi, Zurag Zu'in Gazar 1987: 9]。

モンゴル国の行政機構は、県 (*aimag*)、郡 (*sum*)、行政区 (*bag*) と組織され、チョロート郡は 5 つの行政区に分かれる。そのひとつが調査地バヤン・ハイルハン行政区 (以下、「ハイルハン」とする) であり、これはハノイ川の集水域と重なる。ハイルハンの中央部には「行政区の中心地」がおかれ、そこには集会所・チョロート郡 8 年制学校の分校・公務員宿舎などに利用される 5 つの固定建造物がある。

ハイルハンの人口は 715 人、世帯数は 182 戸であり、そのうち 140 世帯が年間を通じて牧畜に従事している「牧畜世帯」である (1995 年 12 月現在。バヤン・ハイルハン行政区作成統計より)。1 世帯あたりの構成員数は平均 3.9 人である。モンゴルでは、原則として夫婦と

3) バヤン・ハイルハン行政区では 2001 年秋から、特定非営利法人モンゴルパートナーシップ研究所が畜産物流通システム構築プロジェクトをおこなっている [小長谷 2002]。

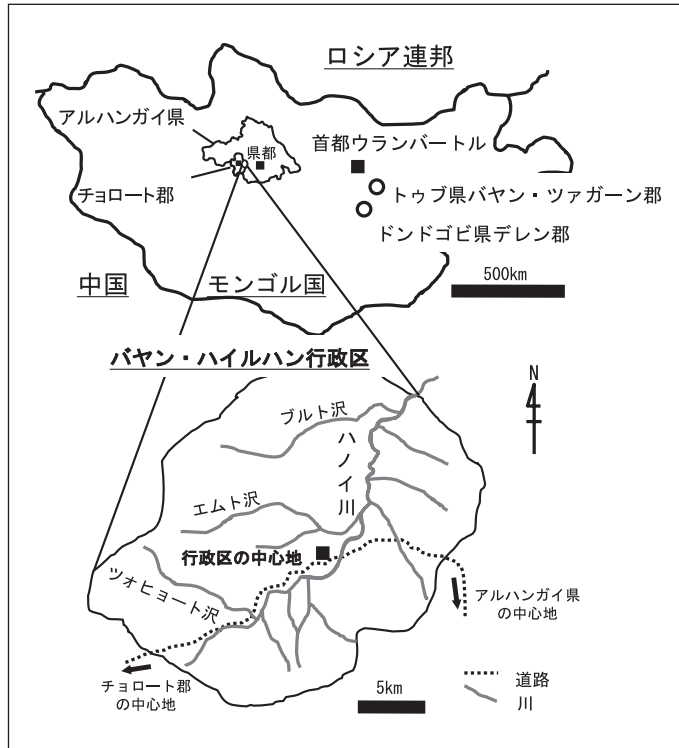


図1 調査地

未婚の子らからなる核家族が、居住・家畜所有・消費の単位、すなわち「世帯」をなす。家畜は世帯主の名義で私有財産として登録され、課税される。ハイルハンの青年男女は20歳前後で結婚し、親からゲルと家畜を与えられて世帯として独立する。

ハイルハンの人々の主な生業は牧畜である。⁴⁾ 飼育されている家畜は、ヒツジ (*khon'*)、ヤギ (*yamaa*)、ウマ (*aduu*)、ウシ (*mongol u'kher*)、ヤク (*sarlag*)、ウシとヤクの雑種 (*khainag*) である。ただし、ウシ、ヤク、ウシとヤクの雑種は放牧管理のうえで区別されることはなく、概念上も「ウシ」(*u'kher*) と総称されるので、本論でもこれらをまとめて「ウシ」とよび、「1種類」の家畜として扱う。

ハイルハンには所有家畜頭数の少ない小規模経営の世帯が多く、1 牧畜世帯が所有する総家畜頭数の平均は1995年12月現在81.5頭であり、これは全国平均(168.8頭)の半数にも満たない。一方、家畜種別の所有率からは各世帯が多種類の家畜を維持していることがわかるが

4) 一部の人は牧畜に加えて、キツネ・シカ・マーモットなどの毛皮獣の狩猟やネギ・根茎類の採集をおこなう。農耕はほとんどおこなわれていない。畜産物以外の生活必需品である小麦粉、茶、衣料品等は、畜産物との交換で商人から入手される。

(表 1), これは自給的な牧畜経営において多様な畜産物および用益を得るためである。⁵⁾

ハイルハンの人々は、数日から数ヶ月ごとに居所を移す遊動生活をしている。本論では、彼らがゲルを建てて滞在する場所を「キャンプ」とよび、ある地点でゲルを建てて一定期間そこに滞在することを「キャンプする」と表現する。キャンプや放牧地として利用される土地はすべて国有で、原則として誰でも自由に利用してよいとする理念がある。ただし、冬営地や春営地として利用される、家畜囲いや倉庫などの固定構造物がおかれている地点とその周囲の牧草地には、これを繰り返し利用して維持、管理している世帯に優先的な利用権が認められている。⁶⁾

モンゴルでは子どもは 8~18 歳の間に最長 10 年間の無償教育を受けることが期待されている。ハイルハンでは 20 代以上の者のほとんどがある程度の教育（内容は数ヶ月間の識字講習から 10 年課程の修了までさまざま）を社会主義期に受けており、彼らは自分の子どもにも少なくとも 2~3 ヶ年の初等教育を受けさせたいと考えている。そして行政区の中心地には、郡の 8 年制学校の分校⁷⁾(以下、これを「学校」とよぶ)がある。このため、初等教育課程の子どもをもつ世帯は 9 月の始業から 5 月の終業までの期間、子どもを学校へ通わせるため行政区の中心地周辺でキャンプする。ただし行政区の中心地周辺では家畜の飼育が制限されていたため、⁸⁾ その間家畜は親族などに預託していた。ハイルハンでは人口の 58%が 20 歳以下（前

表 1 ハイルハンの家畜所有状況

	ウマ	ウシ*	ヒツジ	ヤギ	合計
総頭数(頭)	1236	2716	6117	1347	11406
1世帯あたりの平均所有頭数(頭)**	8.8	19.4	43.7	9.6	81.5
所有率(%)***	93.6	99.3	90.7	82.9	

1995 年 12 月現在。バヤン・ハイルハン行政区の未公開統計により筆者作成。

*ウシ、ヤク、ウシとヤクの雑種を含む。

**ハイルハン在世帯のうち、年間を通じて牧畜に従事している「牧畜世帯」(140 世帯)の状況を示した。

***特定の畜種を所有している世帯の数が、牧畜世帯(140 世帯)に占める割合。

- 5) 民主化後のモンゴルの牧畜生産においては、各世帯が複数種の家畜を少数頭ずつ維持して多様な必要に対応しようとする自給的(domestic-subsistence)な傾向が指摘されている [Sneath 1999b: 226, 232].
- 6) 民主化以後のモンゴルでは牧畜資本の私有化が進められている。牧地は、1992 年の憲法では従来どおり国有とされたが、地方によってはその後、冬営地や春営地に対して占有証書が交付されるなど権利の固定化がみられる (Kazato [2005] 参照)。だが調査時点のハイルハンでは、キャンプに対する権利の明文化はおこなわれていなかった。
- 7) 分校は 1997 年度には 3 年制、1998 年度には 4 年制になった。上級課程に進学する子どもは郡の中心地で下宿や寮生活をして本校へ通う。
- 8) 行政区の中心地周辺では、季節的な人口集中ともなう過放牧や糞などによる景観破壊を懸念して、ウシ以外の家畜の持ち込みが禁止されている。ウシは端境期である冬から春にも搾乳でき、人々の不可欠な食料供給源であり、飼育頭数が少ないこともあって中心地での飼育が許可されている。

掲のハイルハンの統計より) の若年層であることもあり、実際に多くの世帯が子どもの教育の都合にあわせて生活していた。

3. 牧畜生産の季節性と季節ごとの放牧環境

モンゴルの人々は、1年のうちに大きく変化する自然環境を「春」(*namar*)、「夏」(*zun*)、「秋」(*khavar*)、「冬」(*o'vol*)の4つの季節として明確に意識している。家畜の生産性には強い季節性がみられ、牧畜生活は季節を単位に組織されている。

ハイルハンにおける年間の牧畜作業の詳細は別稿〔風戸 1999: 23-35〕に譲るが、概略は次のとおりである。牧民にとって1年は「春」、すなわち家畜の出産期に始まる。グレゴリオ暦より1~2ヵ月遅いモンゴル暦の新年が開けるとウシ、ヒツジ・ヤギ、ウマの順で出産が始まる(以下、文中の月表記はグレゴリオ暦に従う)。なかでもヒツジとヤギの出産は3~4月に集中するように生殖管理されている。5月頃に、水鳥の飛来とともに「夏」が訪れ、仔畜が生えたとの青草をはみだすと搾乳期に入る。6月末から7月末には搾乳の最盛期を迎え、ウシを朝晩2回、ヒツジとヤギを午後3時頃に1回、ウマを朝から晩まで2時間おきに5回、と1日に計8回の搾乳作業がおこなわれる。生乳の一部はヨーグルトや馬乳酒として夏の間に消費されるが、大部分は乳生産が減少する冬から春に備えて加工・保存される。「人民革命記念祭(7月11日)の翌日は『秋』』といわれているが、この頃から得られる乳量が次第に減り、9月には初雪が降り10月には川が凍りはじめる。11月、牧民たちは翌春までの食料となる家畜数頭をまとめて屠殺する。家畜が脂肪をもっとも多く蓄え、解体された肉は自然に冷凍・乾燥される屠殺の適期なのである。そして長く厳しい「冬」が始まる。

次に、季節ごとの放牧環境について検討する。ハイルハンの人々は年に4~10回、移動(*nu'udel*)をおこなう。ゲルや家畜囲いを解体して牛車に乗せ、新しいキャンプに移り、そこにゲルや家畜囲いを立て直す。年間の移動回数は世帯により異なるが、季節の変わり目にあたる2~3月、5~6月、8~9月、10~11月はそれぞれ、春営地(*khavarjaa*)、夏営地(*zuslan*)、秋営地(*namarjaa*)、冬営地(*o'voljoo*)への移動シーズンである。ハイルハンにおける季節ごとの牧地利用の実態を明らかにするために、1997年の夏から1998年の春までの85ヵ所のキャンプの位置をGPSで継続して記録した。これによって、日帰り放牧のベースとなるキャンプの分布の季節変化を正確にマッピングすることができた(図2)。この図から一目瞭然のように、夏とそれ以外の季節との間にはキャンプの分布と牧地利用に大きな差異がある。そこで以下では夏と秋から翌年の春までを対比して論じる。

夏には、キャンプはハノイ川沿いの平野部に集中する。放牧にはハノイ川の氾濫原や支流との合流点付近など、数km先まで見渡せる広い平野が利用される。樹木がなく見通しのよい「オープン」な草原では、有蹄類の群れはみずからまとまってあまり拡散しないといわれて

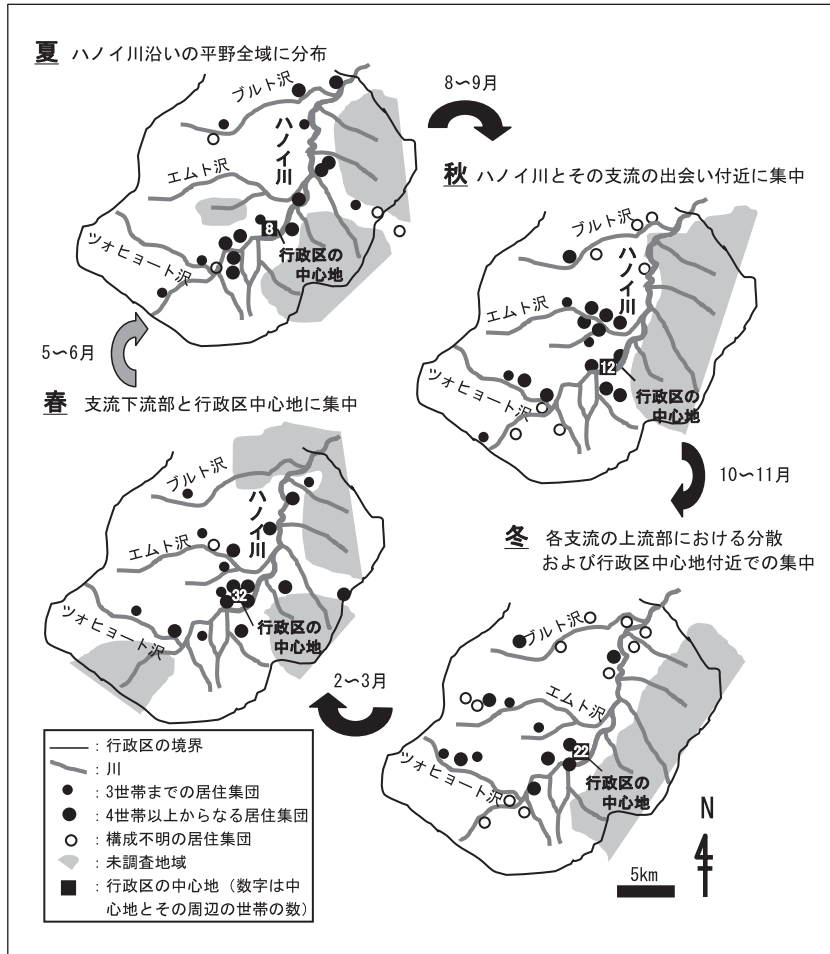


図2 ハイルハンの季節ごとのキャンプ分布
(1997年夏~1998年春の事例)

いる [今西 1972: 94; 太田 1982: 25]. 牧民にとってもキャンプから遠くまで見渡せる夏の牧地では見張りがしやすく, 牧童はキャンプにいたままで双眼鏡を使って群れを監視する. ヒツジ・ヤギの群れが稜線を越えて山の向こう側へ行きそうなときや, ほかの群れと接近しているときには, 牧童は出かけて行って群れを方向転換させキャンプの方へ追い戻す. なお, 夏の放牧地ではいたるところに小川や湿地があるので, 家畜は自由に水を飲む.

秋から春にかけては, ハノイ川の支流域にキャンプが分散する. なかでも秋営地・春営地には河口部が選ばれる. 一方, 冬営地としては支流上流部の支谷などが選好される. そのような地形は北西の季節風を遮るからである. 放牧地としても狭い谷地が利用されるため, 放牧ルー

トはいくつもの谷と尾根を含むものとなり、牧童の視界は限定される。加えて、秋から冬にはオオカミ (*Canis lupus*) の被害が増えるという。このため秋から初春の日帰り放牧では牧童が放牧中のヒツジ・ヤギの群れに随行することが多い。給水については、秋には牧童が家畜を1日1回川岸へ誘導するが、根雪となれば家畜は自由に雪を食べる。秋から春にかけての分布のもうひとつの大きな特徴は行政区中心とその周辺に人口が集中していることである。そのほとんどが学校に通う子どものいる世帯である。⁹⁾

さらに筆者は、上記の分析の翌年にあたる1998年夏から1999年春までの1年間についてキャンプの位置を聞き取りによって確定した。この期間のキャンプの分布傾向は、前年度の実測調査の結果とおおむね一致した。このことから、上述した放牧環境の季節変化のパターンは、ハイルハンの一般的サイクルを示すものと考えられる。もうひとつ強調しておきたいことは、キャンプ地の選択が井戸の位置に制限されないことが、ハイルハンの大きな特徴だということだ。¹⁰⁾ このことは年間をとおして地表水が利用できるというハンガイ山地域特有の自然条件のもとで可能となっている。

4. 多種類家畜の放牧群編成と社会・経済的背景

4.1 家畜の群れを分けて管理する必要性

ハイルハンでは各世帯が複数種の家畜を飼養しているが、放牧にさいしては、ヒツジ・ヤギの混成群とウシとウマはそれぞれ移動速度や採食リズムが異なるため、別々に管理されている。これらはさらに季節的な生産サイクルに従って、性・成熟度によりいくつかの群れに分けられ、空間的に分離されていた。日帰り放牧のさいにまとめて管理される家畜の群れを「放牧群」とよぶ。

ハイルハンにおける放牧群の内部構成と空間配置の季節変化を、1997年夏から1998年春におけるマンダー氏(63歳)¹¹⁾の世帯(本論ではこれを「マンダー家」とよぶ。ほかの世帯についても世帯主男性の名前で世帯をよぶ)の事例により示す(図3)。群れの分け方は1日の中でも搾乳の前後などでは異なるが、最も細かく分けられていた時点を示す。

春営地では、新生仔や母畜の一部がそれ以外の個体と区別して管理される。仔ウシは、生後数日間は寒さとカラスやオオカミの襲撃から守るため、そして母をキャンプに連れ戻すためのおとりとして、また人間が搾乳するために勝手に哺乳させないように、放牧には出されず囲い

9) 子どもらは初秋、草原のキャンプから数kmをウマで通学する。だが晩秋に寒さが増し吹雪が多くなると通学をいやがって休みがちになるため、家族は家畜を他の世帯に預託して行政区の中心地付近に移動する。そして春、ヒツジ・ヤギの出産期が近づくと家畜を引き取って再び草原に出て行く。

10) モンゴルでは社会主義期に全国で多くの井戸が建設された。だが、調査時点のハイルハンでは井戸は放棄され、飲料水には春から秋は川・泉の流水が、冬には川の氷や雪を溶かしたものが利用されていた。

11) 年齢は1997年現在の満年齢を示す。

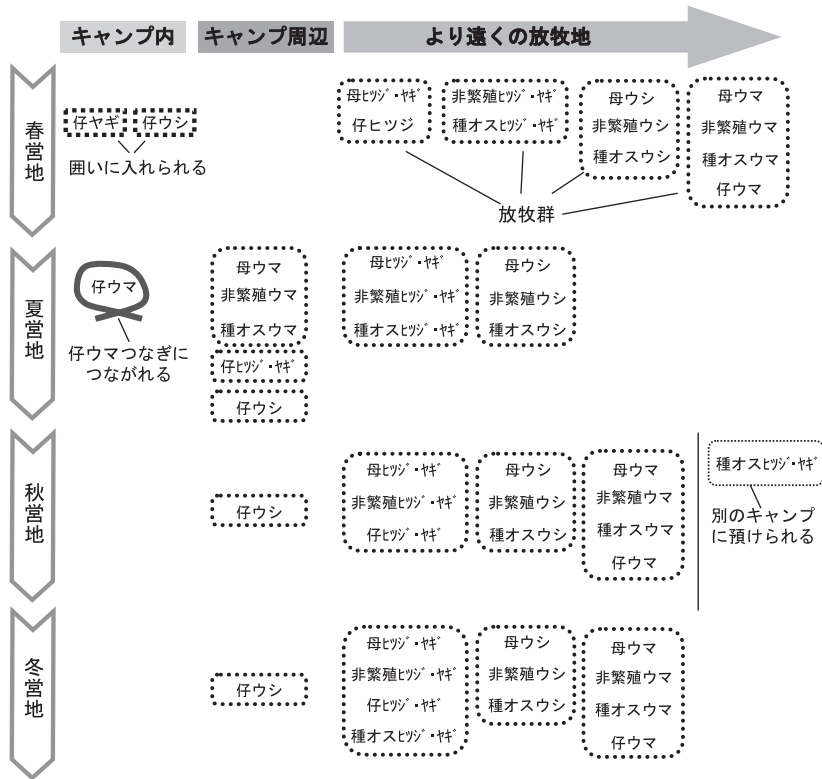


図 3 放牧群の内部構成と空間配置の季節変化
1997 年夏から 1998 年春のマンダ一家らの実践をもとに示した。

の中にとどめおかれる。仔ヤギは、寒さに弱く、自由に哺乳させると飲み過ぎて下痢し、また母を見失って迷子になりやすく、母ヤギの方も仔を取り違えて母子ペアの組み合わせに齟齬が生じやすいなどの理由で、ゲルや囲いの中で数週間育てられる。仔ヒツジにはそのような問題がないとして母と一緒に放牧に出される。だが仔ヒツジと出産前後の母ヒツジだけは、それ以外のヒツジ・ヤギ群とは分けられ、キャンプからより近い場所で放牧される。仔ウマは、キャンプから遠く離れた場所で生まれて母やほかの群れメンバーとともに行動する。牧民は春にはウマを数日間にわたってキャンプに連れ戻さないで自由に遊動させるため、仔ウマの誕生に気づかないことも多い。

夏营地では、仔ウシと仔ヒツジ・仔ヤギがキャンプ周辺で草を食べはじめるようになる頃にヒツジ・ヤギの搾乳も始まり、仔はキャンプ周辺で、母は離れた場所で放牧される。その後ウマも搾乳期に入り、毎朝キャンプに連れ戻されるようになる。朝、仔ウマは 1 頭ずつキャンプ内の仔ウマつなぎにつながれ、哺乳できない状態で 1 日中過ごす。仔ウマがつながられてい

ると、母をはじめ、1頭の種オスによって統率された群れの大部分がキャンプ周辺にとどまる。

秋営地に移ると一般にウマとヒツジ・ヤギは搾乳しなくなるため、仔を母の群れに入れて一緒に放牧する。ウシは通年搾乳するため秋以降も仔と母を分けて放牧する。9月初旬には、ヒツジ・ヤギの早すぎる妊娠を防ぐためにヒツジ・ヤギの種オスの管理を外部に委託する（詳しくは4.3参照）。

10～11月頃、ヒツジ・ヤギの種オスが群れの中に放たれ、冬営地ではヒツジ・ヤギの全個体が一群として放牧される。¹²⁾

以上をまとめると、ハイルハンでは一般的に、年間をとおして家畜を4つ以上の放牧群に分け、別々の場所で放牧している。¹³⁾ このように放牧群を分ける理由は次の5つである。(1) 1日に移動できる距離や放牧中の移動速度の異なる個体と一緒に放牧できない。(2) 新生仔を保護する。(3) 仔をおとりとして母を含む群れ全体をキャンプに繋ぎとめる。¹⁴⁾ (4) 搾乳量を確保するために、仔畜が自由に哺乳できないようにする。(5) ヒツジ・ヤギについては出産時期を限定するため、性成熟に達したオスとメスを一定期間遠ざけておくことによって交尾を管理する。

それぞれの放牧群に対しては、これらを管理するための労働力が必要とされる。とくに夏の搾乳期には、本来は一緒にいて随時哺乳するはずの仔と母の群れを合流させずに放牧するために絶えず注意と介入が必要である。ところが、家畜を所有し管理する牧民の単位すなわち世帯は核家族からなり、その構成員数は平均すると子どもを含めてわずか3.9人である。この問題を解決する方法として考えられるのは、ほかの世帯と分業・協業することにより各世帯の負担を軽減すること、ないしは労働強度を高めることである。調査時点のハイルハンでは圧倒的に前者が好まれていた。放牧を分業・協業する具体的な方法としては、複数の世帯が居住集団をつくって家畜を共同で放牧することに加え、世帯間で家畜の群れを預受託することもみられた。この2点について次節以下で詳解する。

4.2 居住集団における家畜の共同管理

居住集団は、ハイルハンでホト (*khot*) またはアイル (*ail*) とよばれる、居住の近接と牧畜作業の協同によって特徴づけられる複数世帯の一時的な集まりである。季節的な移動は世帯を単位としておこなわれる。だが、各季節のキャンプでは原則として複数の世帯が数十 m の距離

12) 厳冬期や春先には、日帰り放牧に耐えられないと判断された一部の疲弊した若年個体には飼料を与え、キャンプ周辺にとどめることがある。

13) ハイルハンでも、所有家畜頭数が多くかつ家畜を丁寧に世話したいと考える人々の居住集団では、より細かく群れを分けていた。なお砂漠性草原(ゴビ)地域におけるラクダを含む家畜群の編成については稲村ほか[2001: 133-134]参照。

14) 仔をおとりとして群れの管理に利用することの意義、とくにドメスティケーションとの関係については、小長谷[1991: 63-64]、谷[1997: 63-70]参照。

に近接してゲルを建て、¹⁵⁾ 家畜（ウマを除く）を種類ごとにまとめてひとつの放牧群として編成して日帰り放牧にかかる労働を分業していた。

以下では、居住集団における家畜の共同管理を、家畜囲いの利用と日帰り放牧の分業・協業に着目して検討する。

家畜囲いは、夜にその中で家畜を眠らせたり、家畜の世話をするときに一時的に收容するための施設である。各キャンプにはいくつかの囲いがある。囲いの使用目的や群れの分け方は季節により変化し、居住集団ごとの家畜頭数も異なるので、囲いの形状・数・大きさは多様である。形状は、家畜が出られない程度の格子目の大きさの木柵を複数組み合わせた可動式のものから、壁と屋根を牛糞で塗り固めた固定的構造物までさまざまである。囲いを利用する社会的単位に注目すると、ヒツジ・ヤギを夜に收容する囲いについては、原則として居住集団を構成するすべての世帯が共同でひとつの囲いを利用する。¹⁶⁾ だがウシとウマの囲いについては、世帯ごとあるいは居住集団内の一部世帯のみが共同で設置・利用することが多い。囲いのこのような利用形態から、ヒツジ・ヤギの管理こそが居住集団における家畜の共同管理の要であることがわかる。

日帰り放牧は、居住集団の中で世帯を単位として当番制でおこなわれる。当番の世帯はその日 1 日、同じ居住集団の全世帯の家畜をまとめて放牧する役割を担う。¹⁷⁾ そして翌日は別の世帯がこれをおこなうのである。ただし当番を組織する方法は、搾乳の最盛期である夏とそれ以外の季節とで異なる。

夏には、ウシ放牧の当番とヒツジ・ヤギ放牧の当番の 2 つが別個にたてられる。各世帯は順番でこれらを担当するが、居住集団を構成する世帯の数によってはひとつの世帯が両方の当番に同時にあたることもある。当番の仕事は、群れを仔畜とそれ以外とに分けて放牧し、両群が合流しないように、また別の居住集団の群れと混ざらないように注意しながら採食させ、搾乳の時間になると群れをキャンプに連れ戻すことである。¹⁸⁾ 加えて、オオカミや泥棒から群れを守ることも重要である。

秋から春には、母子を分離して放牧する家畜種はウシのみとなり、放牧の仕事が楽になる。一般にこの時期には、放牧当番は全種類の家畜の放牧を一手に引き受けるものとして合理化さ

15) 1997 年春から 1999 年春に筆者がハイルハンで観察した 90 ヲ所のキャンプのうち、1 例のみでは 1 世帯が単独でキャンプしていたが、89 例では 2~7 世帯が集住していた。

16) ヒツジ・ヤギの囲いの利用方法として、ヤギのみを囲いに收容し、ヒツジは囲いの外側が寝場所となっている場合があった。

17) 多くの居住集団では放牧当番は 1 日交代でおこなわれたが、2 日交代でおこなう居住集団もあった。

18) 一般にウシは乳が張ると自らキャンプに戻ってくるので必ずしも牧童が誘導する必要はないと考えられており、ドンドゴビ県やトップ県では当番は設けられていなかった。ハイルハンでウシ放牧の当番制がみられたこと背景には、ハイルハンにはヤクが多く、ヤクを多く含む群れはキャンプに戻りにくいと考えられていることがある。

れ、各世帯が当番にあたる頻度が抑えられる。¹⁹⁾

なおウマの放牧は基本的に世帯ごとの管理にまかせられている。ウマは移動速度が速いうえ、1頭の種オスによって統率されている群れが集団として自律し、ほかの群れと近接すると攻撃しあうので、人間の都合で群れを編成するのは容易ではない。ただし居住集団を構成する世帯の数・ウマの数ともに少ないときや、繁忙期である夏には、ウマの放牧が当番制でおこなわれることがあった [風戸 1999: 32]。

放牧に従事するのは主に男性であり、放牧には最低男性1人1日分の労働が必要とされる。だが草原の生活において男性には放牧以外にもすべきこと、したいことが多くある。森に出かけて木を切り倒して牛車で運んでくる薪取り、家畜の交換・売買、冠婚葬祭のための長期旅行、草刈り、狩猟、そして飲酒・おしゃべり・賭博など社交の楽しみである。ハイルハンの人々は、居住集団という協業組織をつくって放牧労働を世帯間で分業して合理化を図り、放牧以外のさまざまな活動のための時間を捻出している。

分業のやり方として当番制は、各世帯の労働力や所有家畜頭数の過多に無関係に負担を均等に割りあてるといった特徴がある。当時ハイルハンで放牧労働に関わる問題解決のために当番制が卓越していた背景には、経済基盤の平等さ、すなわち各世帯が所有する家畜の頭数が少なく世帯間のばらつきが小さいという家畜所有状況がある。一般に、ハイルハンを含む森林草原地域では世帯あたりの家畜頭数が少なく、キャンプの規模は大きいものに対して、トゥブ県やドンドゴビ県の砂漠性草原地域では家畜頭数が多く、キャンプの規模が小さいといわれている [Bold 1996]。たとえば2001年のドンドゴビ県デレン郡では世帯あたりの家畜頭数は174.5頭であった(デレン郡役場の統計より)。そこで単独でキャンプしていた世帯の人に「ほかの世帯と一緒に居住集団をつくって家畜を共同管理してはどうですか」と問うと、「家畜の放牧を人に任せて喪失するよりも、自分で管理した方がよい」といって毎日放牧に出かけていた。これに対してハイルハンの人々は、家畜を守り増やすために毎日孤独かつ勤勉に働くことよりも、他者と共同で放牧をおこなうなど、日常生活を社会的に送ることそのものに価値をおいていたように思われる。

4.3 家畜の預受託

ハイルハンでは、世帯間で家畜を預受託しあうことによっても、複数の群れに分けられた多種類の家畜の維持管理が合理化されていた。家畜の預受託の多様なあり方を、預託世帯の社会的な事情によるものと家畜の繁殖リズムに関係したものに分けて説明する。

社会的な事情による預受託は、種類ごとに一括した群れ単位でおこなわれる。²⁰⁾ まず家族の

19) ハイルハンの一部の居住集団においては、精緻に肥育を施すため、秋から冬にかけてもウシとヒツジ・ヤギの放牧当番を別々に組織し、それぞれに1人の牧童がつけられていた。

発展サイクルとの関連でいえば、一般に結婚してから数年しかたたない世帯は労働力が少なく、世帯メンバーが結婚式や親戚訪問のために一時的に家を離れたり、病気治療・出産のため県の中心地や首都へ出かけると、労働バランスが崩れて牧畜作業に支障をきたす。それでこの間だけ家畜をほかの世帯に預けて管理してもらうのである。子どもが就学年齢に達すると、子どもの通学のために冬期の 4~6 ヶ月を行政区の中心地付近で過ごすことになる。するとその期間はウシ以外の家畜を手元におくことができず、ほかの世帯に預けて放牧してもらうしかない。通学児童を抱える 2 世帯間ではしばしば、一方が家畜を預かって草原で冬を越し、他方が子どもを預かって中心地で冬を越すという分業がおこなわれた。この役割分担が年毎に交代することもあった。牧畜世帯の発展サイクルの中では、子どもの通学というどの世帯にも起こりうる決定的な要因によって家畜を自分で管理することができない時期が生じるため、牧畜世帯間で家畜の預受託が広くおこなわれているのである。

また、家畜を自分で管理できないわけではないが牧畜作業を合理化するための預受託もみられた。一方の世帯が放牧管理する家畜の種類を減らしたり、互いに管理する家畜種を専門化したりするのである。たとえばトゥルーフ氏 (55 歳) は 1997 年の夏、ヒツジ・ヤギとウマの群れを別の場所でキャンプしている息子マクサル氏 (本文中に登場する人々の血縁関係については図 4 を参照) に預け、自らのキャンプにはウシと少数の乗用馬だけをつれてきた。このことによりトゥルーフ家はウシの放牧当番のみに参加し、ヒツジ・ヤギの放牧当番の負担を回

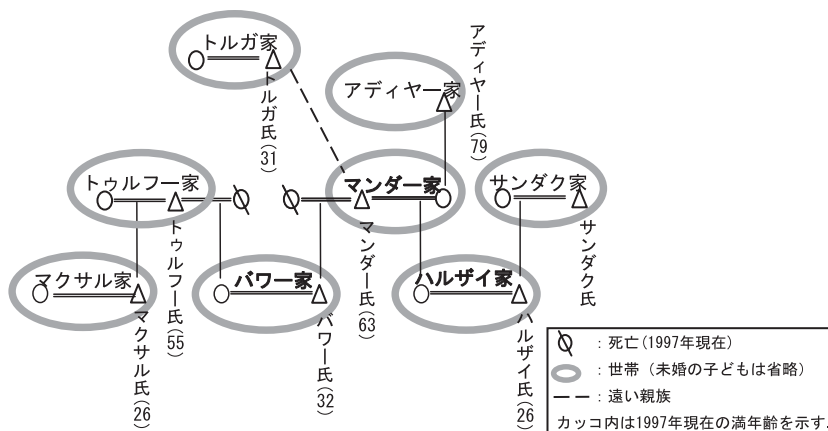


図 4 マンダー家、パワー家、ハルザイ家をめぐる親族関係

20) 事例は少ないが、受託者が畜産物や利益を得ることを目的とする個体単位での家畜預受託もおこなわれていた。たとえば、搾乳できるメスウシの頭数が少ない世帯が、それを比較的多くもっている親族に依頼し、その年に限ってメスウシ 1 頭をその仔ウシとセットで借り受けて乳を利用することがみられた。

避していた。また、パワー氏（32 歳）は数年間にわたりヒツジ・ヤギの管理を父マンダー氏（63 歳）に委託し、その代わりにマンダー家はパワー家にウマの管理を任せるというように、それぞれが管理する家畜種を限定していた。²¹⁾

牧畜以外の生計手段をもっている世帯が定住区に居所をおき、家畜を草原の牧畜世帯に預託している場合もある。たとえばマンダー家は、郡の中心地に住む年金受給者である妻方の父アディヤー氏のヒツジ・ヤギの群れを受託している。パワー家は、行政区の中心地に住んでいる知人の年金受給者のウマの群れを預かっている。行政区や郡の中心地に住む学校教師の家畜を預かっている世帯もあった。ただし定住区に住む多くの人々もゲルに住んで季節的に移動するし、定住区と草原の間で住人の入れ替わりもある。²²⁾ 長期的にみれば、このような預受託関係においても預託者と受託者の役割が交代する可能性がある。

2 世帯間で家畜の預受託がおこなわれるとき、その開始時にも終了時にも報酬が交渉されることはなく、労働の代償は、預託者が受託者に食品・衣服・家畜・現金などを贈与するというかたちで支払われていた。また預託者の家畜がオオカミによる食害などで失われても補償されることはなかった。²³⁾ このような家畜の預受託は、契約関係ではなく親しい者どうしの相互扶助と位置づけられている。

一方、家畜の繁殖に関連した預受託では、行政の指導のもとで多数の預託者に対して 1～2 世帯の受託者が、個体単位で契約関係として家畜を預かる。毎年 9～10 月に、行政区内のほとんどの種オスヒツジと種オスヤギがもとの群れから分離され、これをその年に種オスを世話する仕事に従事することを希望して行政区長から任命された 1～2 世帯が一括して管理する。²⁴⁾ 1997 年のハイルハンでは、有志の 1 世帯がエムト沢で 9 月初旬から 11 月初旬にかけてヒツジ・ヤギの種オス約 70～80 頭を預かった。各預託者は 1～3 頭の種オスを個体単位で預ける。ヒツジ・ヤギの種オス 1 頭を預けた世帯は、春に同種の新生仔 1 頭を受託者に支払うよう行政によってあらかじめ決められていた。

21) パワー家は、マンダー家と共に居住集団を形成する時にはヒツジ・ヤギの放牧当番に参加した。しかしパワー氏に彼のヒツジ・ヤギ個体間の系譜関係を尋ねると「父に預けているのでよく知らない」といった。

22) 筆者は別稿で、モンゴルの地方に暮らす人々は、草原の生活と定住区での生活の両方を人生のさまざまな段階で状況に応じて選択していることを論じた [風戸 2002]。

23) モンゴルの牧民は、1950 年代後半から 1990 年代初頭まで社会主義的な計画経済の中で、牧畜生産協同組合から家畜を受託して生産ノルマや生産契約のもと賃労働として牧畜生産をおこなった経験を持ち、契約関係と互助とを明確に区別している。

24) モンゴルではヒツジ・ヤギの生殖管理には、種オスをメスのいる群れから分離する方法のほか、種オスに前掛け状の避妊具をつける方法も用いられる。しかし発情期にあたる秋は、冬に備えて家畜に脂肪と体力をつけさせる時期でもあり、放牧中に種オスがメスを追いかけ回すと採食の妨げになるといって種オスを群れから分離するのが望ましいとされる。

4.4 放牧群の編成とその変化

4.1 で述べたように、日中はともに放牧され、ヒツジ・ヤギならば夜にひとつの囲いに入れられる家畜の群れを本論では「放牧群」とよぶ。ひとつの放牧群には、居住集団を共にする複数の世帯の、みずから所有する家畜と預託された家畜とが含まれている。ここで、ひとつの世帯が恒常的に管理している家畜の群れ、すなわちその世帯が所有しかつ実際に世話している個体と、その世帯に 1 年以上継続して預託されている他世帯の個体とを合わせたものを、その世帯の「管理群」とよぶことにする。管理群のメンバーシップは、再生産や消費以外には変わることなく安定している。

放牧群の編成が家畜の生理・生産の季節性にあわせて変化することは 4.1 で述べたが、放牧群の編成はまた、居住集団の構成変化や家畜の預受託関係の変化によっても変わる。このことをヒツジ・ヤギを事例として以下に説明する。

1997 年 5 月から同年 10 月にマンダー家の管理群（パワー家が所有するヒツジ・ヤギを含む）が含まれていた放牧群の編成の変化（図 5-a）と、同期間にマンダー家が経験した居住集団の構成の変化（図 5-b）とを比べると、居住集団を構成する世帯の組み合わせが季節ごとに変わっており、それと同時に放牧群の編成も大きく変わっていることがわかる。マンダー家が 1997 年春から 1998 年冬に経験した 7 通りの居住集団（図 5-b）を検討すると、居住集団を構成する世帯がまったく変わらずに季節を越えて継続した例はない。このように居住集団の編成が頻繁に変化するのには、パワー家やマンダー家のように学校に通う子どものいる世帯が季節的に行政区の中心地に移り住むことに加え、ハルザイ家のような若い夫婦が妻方・夫方双方の親族の間を行き来することの影響が大きい。その背景には、夫方・妻方に関わらず父母とはできるだけ近くに住んで助けるべきだという双系的な居住規範がある。

放牧群の編成の変化には家畜の預受託も影響している。ひとつの放牧群を構成する複数の管理群の管理者の組み合わせ（図 5-a）と居住集団を構成する世帯の組み合わせ（図 5-b）は必ずしも一致しない。たとえば 1997 年夏の居住集団にはトゥルフ一家がいるが、同じ時期の放牧群の中にトゥルフ一家の管理群はみられない。このときトゥルフ一家のヒツジ・ヤギの群れは別の居住集団に属する息子の世帯（マクサル家）に預けられていた。1997 年秋の末には放牧群にトルガ家の管理群が加わるが、居住集団にはトルガ家は加わっていない。これはトルガ家が子どもの通学の都合でヒツジ・ヤギの群れを翌春までの約束でハルザイ家に預けたためである。このように、居住集団の構成が一定でも、家畜だけが一時的に預受託されることにより、放牧群の編成は変わることがある。

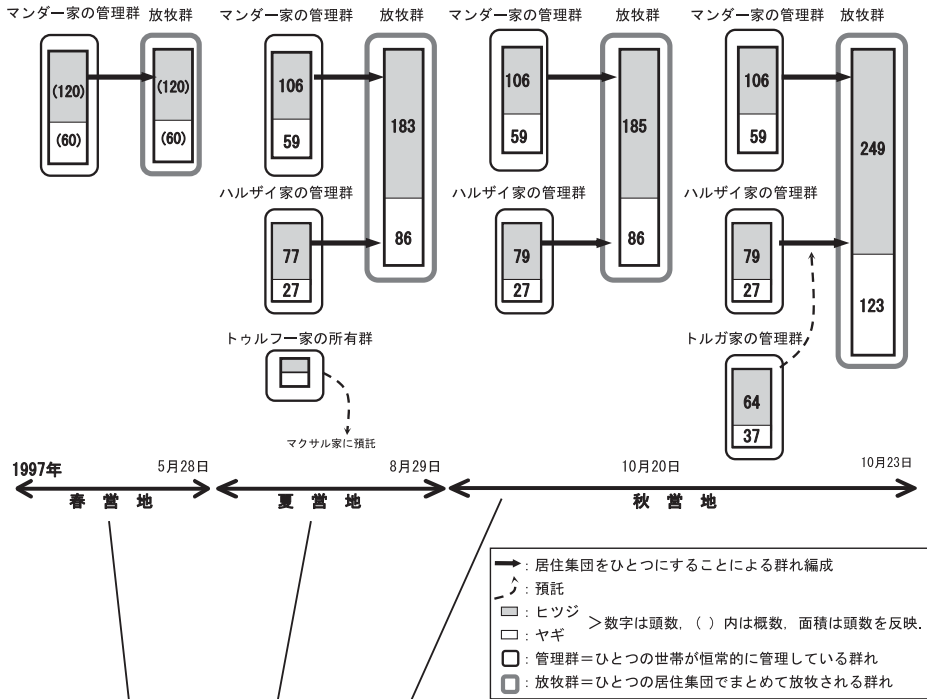


図5-a マンダー家が管理するヒツジ・ヤギ群が含まれる放牧群の編成変化

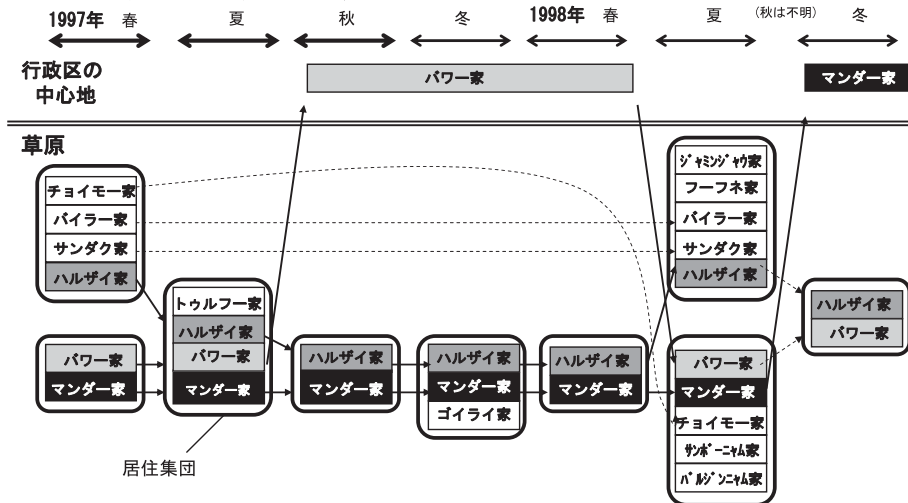


図5-b マンダー家、パワー家、ハルザイ家を含む居住集団の構成変化

図5 放牧群の編成変化と居住集団の構成変化

5. ヒツジ・ヤギ放牧群の日帰り放牧

5.1 秋営地における多種類の家畜の放牧管理

以下に、1997 年のマンダー一家らの秋営地におけるヒツジ・ヤギの放牧を中心とした家畜管理の事例から、ハイルハンにおけるヒツジ・ヤギの日帰り放牧の特徴を明らかにする。

本節ではマンダー一家らが秋営地でおこなっていた家畜管理の概要を記述し、4 種類もの家畜がどのように同時に放牧管理されていたのかを示す。この秋営地はハノイ川の支流であるツォヒョート沢中流に位置し、マンダー一家は娘夫婦であるハルザイ家と 2 世帯で 8 月 29 日から 10 月 23 日の 56 日間ここでキャンプした。この期間の日最低気温は $-5\sim-15^{\circ}\text{C}$ で、9 月 11 日にはまとまった降雪があった。ツォヒョート沢では当時 3 つの居住集団、13 世帯が秋営していた。最上部にマンダー一家ら 2 世帯からなる居住集団（これを rg-M とよぶ。rg は residential group の略、M はマンダーの頭文字である）、その約 300m 下流にゴンボー家など 5 世帯の居住集団 (rg-G)、そしてさらに下流にはタンガー家など 6 世帯からなる居住集団のキャンプが位置していた。放牧地としては、rg-M と rg-G はツォヒョート沢の中流部を、タンガー一家らは下流部を利用していた。

rg-M で管理されていた家畜の頭数は、はじめはウシ約 70 頭、ウマ約 60 頭、ヒツジ 185 頭、ヤギ 86 頭だったが、10 月 19 日の夕方以降はトルガ氏がヒツジ 64 頭、ヤギ 37 頭をハルザイ家に預託したため、ヒツジは 249 頭、ヤギは 123 頭となった。放牧群としては、ヒツジ・ヤギ、仔ウシ（哺乳中の 0 歳または 1 歳の仔ウシ）、成ウシ（母とその他のウシ）、ウマの 4 つに分けられていた（図 3 の「秋営地」に同じ）。成ウシとウマは移動速度が早いので、放牧中の 4 群間の距離は数 km に及ぶこともあった。またウマは、ハルザイ家の種オスを中心とする群れと、マンダー家が管理しているパワー家の種オスを中心とする群れとが別個に行動する傾向にあった。

放牧にかかる労働は、4 つの放牧群すべての放牧を受けもつ当番として、これをマンダー一家とハルザイ家が 1 日交代で担当した。マンダー一家が当番にあたった日には息子のバター（15 歳）が、ハルザイ家の当番の日にはハルザイ氏（26 歳）自身が主に放牧労働に従事した。だが妻たちも群れの動向には絶えず注意し、とくに夕方以降、群れがキャンプから 1km 以内の近距離にいるときには幼い子どもを含めた世帯員全員が群れの世話をした。

1 日の放牧計画を決めるのは、当番の世帯の世帯主つまりマンダー氏（63 歳）またはハルザイ氏である。たとえば 10 月 6 日にマンダー氏はバターに、「成ウシは南西へ、仔ウシは西へ、ヒツジ・ヤギも西へ」と家畜の種類ごとにキャンプを出発させる方向を指示したうえで、仔ウシとヒツジ・ヤギについては主な採食地とそこに至るルートとを方位と地形を表す語を用いて詳細に説明した。長期的な計画、たとえば肥育のための特別な放牧（5.3 で詳述する）の

日取りや場所は 2 人が相談して決めた。

rg-M における 1 日の牧畜作業は次のように進行した。7 時過ぎ（日の出頃）、牧童がウマの囲いを開けてウマを牧地に放つ。その後、夜中に草原へ出ていた成ウシをキャンプへ連れ戻し、女性たちがメスウシを搾乳する。搾乳後、牧童は成ウシを放牧に出発させ、時間差をもうけて仔ウシを別方向へ追う。10 時頃、牧童がヒツジ・ヤギの囲いを開け、その日の放牧地として決めた方向に追い立てるとヒツジ・ヤギは 2~3 列縦隊をつくり早足でキャンプから離れていく。ヒツジ・ヤギがキャンプから出発した時点をヒツジ・ヤギ放牧の「開始」とする。その 30 分から 1 時間後、牧童は乗用馬に乗ってヒツジ・ヤギのいる場所へおもむく。以後、基本的にヒツジ・ヤギに随行し、仔ウシとウマをその数 km 以内にとどまるよう誘導する。14 時すぎ、牧童は全家畜をキャンプの方向へ誘導し始める。15 時頃、ヒツジ・ヤギをキャンプ近くの川辺に導いたところで牧童は群れから離れて「帰宅」し、以後は基本的にキャンプにいて家畜を監視する。ヒツジ・ヤギは水を飲んだ後にその場で座り込むなど「飲水と休憩」をする。そして 30~40 分後、自律的に移動を始める。18 時頃（日没頃）、牧童はまず仔ウシを最初にキャンプに連れ戻して囲いに入れる。その後、ほかの家畜をキャンプ付近に連れてきて、ウシは搾乳する。19~21 時頃、ヤギを囲いに入れ、ヒツジを囲いの周囲に落ち着かせる。これをヒツジ・ヤギ放牧の「終了」とする。ウマを囲いに入れると 1 日の仕事が終わる。

ヒツジ・ヤギの日帰り放牧を分析するため、放牧のプロセスを次の 2 つに時間区分する。放牧の開始から牧童の帰宅までの牧童が群れに随行して統率する期間を「統率期間」とする。そして牧童の帰宅から放牧の終了までの牧童が群れに随行することなく放牧がおこなわれる期間を「放任期間」とする。

5.2 放牧理念

ヒツジ・ヤギの日帰り放牧中には家畜と牧童の間でさまざまなインタラクションがもたれるが、その背景には、モンゴルの牧民の家畜観と放牧理念が存在すると考えられる。以下では放牧に関する理念を 2 つのレベルに分けて分析する。すなわち、日帰り放牧を成り立たせるために不可欠な群れ操作に関わる基本的な理念と、これを満たしたうえで肥育効果を狙う精緻な理念である。

まず基本的な理念について説明する。ハイルハンの人々はヒツジ・ヤギの放牧に関しては、「(牧童が) ヒツジ(・ヤギ)の群れのそばについて見張る」(*kbon' khariulakh*) べきだと考えている。その理由をハルザイ氏は「ヒツジ・ヤギの群れは人がついていて見張り、誘導しなければ、目の届かないところへ行ってしまう。そしてオオカミに食べられたり泥棒に取られたり、ほかの放牧群と混ざりあったり、行方不明になったりする」と説明した。実際にハイルハンでは国内他地域と比べてもオオカミによる食害をはじめとする家畜の逸失が多く、牧民はときには近隣の人々に対してさえも疑心暗鬼になりながら、自分の家畜を守る努力をしてい

た。²⁵⁾

たとえば夜にオオカミの遠吠えが聞こえれば、人々は布団に入っても一晩中戸外の物音に耳を澄まし、イヌが吠えれば戸外に飛び出して叫び声をあげてオオカミを追い払う。とくに秋にはオオカミが人間の生活圏に接近するといわれ、日帰り放牧に出かける牧童は銃を携行する。またハイルハンのほとんどの世帯には数週間から数年間にもわたって行方不明のままの個体があり、人々は機会あるごとに行方を尋ねて探し続けている。これはヒツジ・ヤギに限ったことではない。モンゴルでは一般に、毎晩暗くなって放牧から戻った家畜を数えたり顔ぶれを確認することはない。このためウシ、ヒツジ・ヤギについてはある日ふと特定の個体が群れの中に見あたらないと気づいて行方不明が発覚する。ウマは個体数が少ないので特定個体の不在には気づきやすいが、移動速度が速いため一夜明けたら群れの全部あるいは一部が行方不明になっていることがよくある。家畜の探索は牧畜を営むうえで不可欠の仕事であり、男性は放牧当番が非番の日に家畜搜索の旅に出かける。いくつもの居住集団を訪問して聞き込みをおこない、他の放牧群に紛れ込んでいないか観察し、また自分の家畜が行きそうな場所すなわち前のキャンプ地や毎年利用する冬営地や春営地の周囲などを見てまわる。そして死体も出ずに行方不明が長期化すると盗難の疑いがもたれ、警察に届ける。

対照的な環境として、ドンドゴビ県デレン郡の状況にもふれておこう。この地域にはオオカミがいない。だがデレン郡の牧民も「ヒツジ・ヤギの群れは方向転換させなければ、微風のときには風上に向かって何百 km でもいってしまい、ほかの群れと混ざりあったり盗難にあう可能性があるので、人間が群れを追い戻さなくてはならない」という。

つまりモンゴルの牧民は一般に、家畜を頼りない存在であるとみなしているのである。とくにヒツジ・ヤギは、人間が世話をやかなければオオカミや泥棒による被害、ほかの群れとの混ざりあいといったトラブルに巻き込まれ、群れのまとまりを保つことはおろか最終的にキャンプに戻ってくることもできないというわけである。²⁶⁾ デレン郡の若い男性牧民は、「牧童が家畜を『操作する』(*udirdakh*) のだ。あなたがキーをたたいてコンピューターを操作するのと同じように」といって、牧童の基本的な役割を、そのような頼りない群れの移動ルートと速度をコントロールして統率するものと位置づけた。

次に、肥育の技術を支える放牧理念に着目する。モンゴルでは、ヒツジ・ヤギによく採食させ太らせるには群れの移動速度を抑えることが重要だと考えられている。「ヒツジ・ヤギの放牧中の理想的な状態は群れが『定まる、落ち着く、動きが止まる』(*tohtokh*) ことであり、牧

25) ハイルハンと隣接諸郡の牧民の中には家畜盗難の罪で服役した経験をもつ者がいる。また行方不明になった家畜のうち、盗難が疑われたものの一部は裁判の結果すでに賠償されたが、多くが未解決である。

26) パキスタンのバルーチヤやアフガニスタンのパシュトゥンにおいても、ヒツジ・ヤギの日帰り放牧には同様の理由で牧童が随行するという [松井 1989: 156]。

童の役割は群れを *togtookh* (*togtokh* の使役形、『定まらせる』など) ことであるとデレン郡の牧民はいう。モンゴルでは強い風が吹く日が多いが、そんなときヒツジ・ヤギは早足で風上へ邁進する。これを人間がコントロールしてゆっくり歩かせたり、1 ヲ所に一定時間とどまらせて採食させるのである。とりわけ冬を越す体力を家畜につけさせるべき秋には、栄養価の高い草を多く食べさせて脂肪をつけさせ、またその脂肪が保たれるように注意が払われる。ハイルハンの牧民によれば、「秋には日帰り放牧中にヒツジ・ヤギをむやみに追い立ててはいけない。ヒツジ・ヤギが追い立てられて早足で歩き回ると、せっかくついた脂肪が溶けてしまう」という。つまり秋にはヒツジ・ヤギを早足で長く歩き回らせるのは禁物で、よい草が豊富にある場所にまっすぐ連れて行き、そこでとどまらせて効率よく採食させるべきなのである。²⁷⁾

5.3 日帰り放牧のルートと時間配分

次に、ヒツジ・ヤギの放牧のルートと時間配分に焦点をあてて、実践面から日帰り放牧の特徴について検討する。筆者は、1997年9月17、19、25、26日、10月3～6、9、19～21日

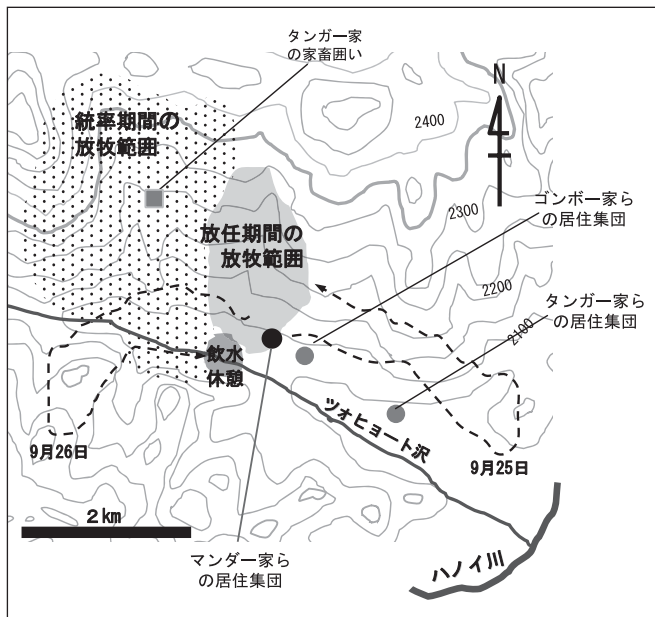


図6 マンダ一家らの1997年秋営地における日帰り放牧の範囲

放牧範囲は、9月17・19日、10月3～6・9・19～21日の10日間の放牧ルートをもとに示した。「統率期間」と「放牧範囲」については本文を参照。ただし9月25・26日には肥育のために特別なルートが取られたため、別途ルートを示した。

27) 19世紀のハルハ・モンゴルの遊牧生活の教訓書である『ト・ワンの教え』にも、ことに秋の放牧時には「追い立てて疲れさせ、遠くへ行かせすぎな」[萩原 1999: 259]と書かれている。

の合計 12 日間の日帰り放牧に随伴し、放牧中の群れの位置を 15 分ごとに GPS で測定した。

図 6 に、マンダー一家らの 1997 年の秋営地におけるヒツジ・ヤギの日帰り放牧の範囲を示した。通常の放牧範囲は、キャンプ北西に広がる標高 2,050m~2,400m の南向き斜面、つまりタンガー家の冬用家畜囲い（この時点では利用されていなかった）を中心とした半径 2km 弱の草地と川辺である。一般的な日帰り放牧のルートと時間配分は次のとおりである。統率期間においては、10 時頃、ヒツジ・ヤギはキャンプから西へ出発し、北西の谷筋に入って斜面を上がり、いくつかの谷と尾根を越えて西進する。14 時過ぎ、キャンプから直線距離にして 3km のあたりで南へ方向転換し、高度を下げつつツォヒョート沢の川辺低湿地に出る。川辺の低地に沿ってキャンプに向かい、15 時頃にキャンプの南西数 100m の地点で川辺に追い込まれる。ここから放任期間となり、飲水と休憩をした後、16 時前頃には自発的に立ち上がってキャンプ北西の斜面に向かい、その後日没までキャンプの周辺で採食する。

ただし 9 月 25 日と 9 月 26 日には例外的なルートが取られた。この 2 日間、牧童は比較的時間群れに随伴してふだんの放牧範囲とは異なる遠い場所まで連れて行った。これは、よい草が豊富で、かつヒツジ・ヤギの肥育に不可欠と考えられていており家畜自身も好んで食べる塩類 (*khujir*) がある場所をピンポイントで選んで採食させるためであった。²⁸⁾ ハルザイ氏は、このような特別な放牧を「家畜を肥育する」(*mal mallakh*) とよび、「秋営地にいる間に 1~2 日はこれをおこなうべきだ」といった。²⁹⁾

放牧時間は、開始から終了までが通常の放牧 (10 日間) では 8 時間~10 時間 36 分、特別な放牧 (2 日間) では 9 時間 24 分と 10 時間 30 分、そのうち統率期間は通常の放牧では 4~5 時間、特別な放牧では 5 時間と 6 時間であった。放牧の行程は、通常の放牧で 10~15km、高度差は 350m であった。

統率期間と放任期間の特徴は以下のとおりである。統率期間においては、1 人の牧童が放牧計画に従って群れを導き、群れの移動の速度とルートおよび採食の場所と時間をコントロールしていた。放任期間は基本的に、放牧計画が遂行された残りの時間と位置づけられ、飲水・休憩・移動・採食のリズムと場所は基本的に家畜に任せられていた。群れの移動は状況に応じて抑制されるが、ハルザイ、バターだけでなくマンダーや妻たちも群れの状態に絶えず注意をは

28) たとえば 9 月 25 日には、群れはキャンプを朝 11 時半頃に出発し、当番のハルザイ氏によっていつもと反対の南東方向、ツォヒョート沢下流方面へと導かれた。12 時半頃、ハノイ川との合流点付近の湿地に着くと、そこでとどめられて時間をかけて採食し、その後ツォヒョート沢下流の広い南向き斜面を北西に進路を取りながらゆっくりと採食するようコントロールされた。群れがキャンプ付近まで戻ってハルザイ氏が帰宅したのは、いつもよりも遅い 17 時 30 分頃だった。

29) ブルト沢上流を秋営地とするある居住集団では「家畜を肥育する」といって、塩類の出るエムト沢河口部までの片道約 12km の道のりを 24 時間かけて往復することを数週間にわたっておこなった。牧童は 24 時間交代で、断続的に睡眠を挟みながら夜通し群れを見張り、誘導した。

らい、就学前の子どもたちを群れへの介入のために走らせることもあった。³⁰⁾

5.4 放牧中の問題：放牧群どうしの混ざりあい

ハイルハンでは、ヒツジ・ヤギの放牧群が放牧中にほかのヒツジ・ヤギ放牧群としばしば混ざりあった。このことは「ホニ・ニーレフ」(*khon' neelekh*, 「ヒツジが混ざる」の意)と表現される。統率期間であっても牧童が群れから目を離したわずかなすきに、ヒツジ・ヤギの放牧群は近くにいたほかの放牧群と啼き交わしあいながら近接し、混ざりあった。だがモンゴルの牧民はヒツジ・ヤギの放牧群どうしが混ざりあうことを忌み嫌っている。ドンドゴビ県デレン郡の老人は、筆者がインタビューのために「ホニ・ニーレフ」という言葉を発することにさえ、「そのようなことを口にすべきでない」と不快を表した。これは、概念が言葉として音声化されることが現実に何らかの作用を及ぼすという信念が存在するためである。

筆者が rg-M における日帰り放牧に同行した 12 日中 5 日、rg-M の放牧群（これを h-M とよぶ、h は herd の略）と rg-G の放牧群（ヒツジとヤギ合計 300 頭強、これを h-G とよぶ）の間で混ざりあいが起きた。これには 2 つのパターンがみられた。1 つは、放牧群どうしが接触し、一方の放牧群から他方の放牧群に一部の個体が移動するもので、本論ではこれを「混入」とよぶ。2 つめは、複数の放牧群が合流して一群となってしまうもので、これを「混交」とよぶ。混交はとくにやっかいな問題とみなされていた。1 日に起きた混ざりあいの回数は 1 回であった。5 日のうち 1 日は混交、4 日が混入で、混入のうち h-M の個体が h-G に移入したのが 2 日、逆が 2 日あった。放牧の担当者は、2 日がハルザイ氏、3 日がバターであった。

たとえば 10 月 6 日、h-M は 10 時 2 分にキャンプを出発して 35 分後に h-G と混交した。牧童バターが h-M を追ってキャンプ北側の広い尾根を上がっていたところに、東から牧童オラーナ（13 歳）が h-G を追ってきた。2 人は出会い、両群の間に身を置いて騎乗のまま 15 分間おしゃべりした。その後 2 人はそれぞれ、別の場所にいるウマの群れの世話をするためにほぼ同時に群れを離れた。その 8 分後、両群から激しい啼き声があがり、斜面下部の h-G が上部の h-M に吸い寄せられるように谷筋を登り詰め両群は混交した。そして斜面に対してほぼ水平に細長い弓形をなして拡散し、啼き声をあげ続けつつも採食しながら頂上へ向かった。

放牧群どうしが混ざりあう時、まず一部の個体が率先して他の放牧群の個体からの啼き声に呼応したり、接近したりし、ほかの個体がこれに追従する形で 2 つの群れがひとつになった。その様子はまるで 2 つの磁石が引きあうようであった。

それ以外にも両群はしばしば近接し、混交・混入の危機に何度も直面した。たとえば 10 月

30) rg-M には 3, 5, 7, 14 歳の子どもがおり、幼い子どもは未熟な統率技術で遊びながら群れに介入することもあった。

19 日、h-M は h-G と緩やかな尾根の上での出会いがしらに、また狭い谷の中で鉢あわせになったとき、の 2 回近接した。しかしどちらのケースにおいても、牧童バターのとった行動は機敏であった。彼は h-G の個体に興味を示し、啼きかけながら近接する h-M の個体たち（ヤギが多かった）にねらいを定め、乾燥した牛糞を投げつけたり、叫びながら近づいたりすることで方向転換させたのである。このように、逸脱しようとする先導個体の動きを未然に防止することで混ざりあいは避けられた。

h-M と h-G が頻繁に近接し混ざりあった背景としては、rg-M と rg-G のキャンプの距離が近かったことや、地形が複雑で狭いツォヒョート沢を放牧地としていたという季節的・地理的な要因の関与が考えられる。両キャンプは約 300m しか離れておらず日帰り放牧の範囲はほぼ重複しており、とくに出発と給水・休憩の時間帯には両群が同時に同ルートを通るために混ざりあいの危機が頻発した。またツォヒョート沢は狭い谷と尾根が複雑に入り組んで見通しが悪い。群れが尾根や稜線付近で散開すると一部の個体は牧童の死角に入りやすいうえ、他の居住集団の放牧群の位置を把握しにくいいため、2 つの放牧群はしばしば尾根での出会いがしらに接近した。

しかしながら、キャンプの分布状態や季節・地形の条件が異なっても放牧群どうしは混ざりあった。たとえば、1997 年 6 月 3 日、マンダー氏らが夏营地としていたハノイ川沿いの広い平野で、彼らの居住集団のヒツジ・ヤギ放牧群が、南西に 1km のところにキャンプをおいていた別の居住集団の放牧群と混交した。すなわちハイルハンでは見通しのよいオープンな場所でもしばしば放牧群どうしの混ざりあいが起きているのである。

次にハイルハン以外の地域で起きた混交の例を示す。2001 年 8 月にドンドゴビ県デレン郡において日帰り放牧の観察をおこなった。このとき、ヒツジ 117 頭、ヤギ 115 頭からなる放牧群が、放牧中にほかの放牧群と混交したほか、夜中にも群れのすべてが勝手にキャンプを離れて他の居住集団のヒツジ・ヤギの群れと混ざりあった。デレン郡では、この時期には夜にヒツジ・ヤギを囲いに収容する習慣がないのでそもそも囲い自体を設置しない。³¹⁾ ある朝起きると、ヒツジ・ヤギが 1 頭残らずキャンプから姿を消していて、あわてて探すと、ほかの居住集団の群れと合流しているのがみつかったのである。放牧群の規模がきわめて大きい例もある。1998 年 7 月、トゥブ県バヤン・ツァガーン郡では、約 1,000 頭からなる放牧群と約 700 頭からなる放牧群が混交したのを観察した。³²⁾

このようにモンゴルでは、季節、地形、地域、群れの規模を問わず放牧群どうしの混ざりあ

31) デレン郡では冬以外、夜にヒツジ・ヤギを囲いに収容しない。これにはオオカミがいないこと、気候が温暖なこと、砂漠性草原地帯に位置するため木材が少ないことなどが関係すると考えられる。

32) 当時この地域ではヒツジ・ヤギを夜に収容する囲いがなかったため、漠とした草原で約 1,700 頭のヒツジ・ヤギをもとどおりに分ける作業は困難を極めた。分離作業には、4人の騎乗の牧童が参加して6時間以上かかった。

いが頻繁に起きています。ヒツジ・ヤギの放牧群は、人間が統率しないかぎりいつでもほかの群れと混ざりあう危険があるという、モンゴル牧民一般的な想定は、こうした事実立脚しているのです。実際、放牧群どうしが混ざりあった瞬間に注目すれば、これはいつも不用意に牧童が群れを離れたすきに起きていた。

だが牧民たちは「混ざりあいの危険性」についてももう一步踏みこんだ認識をもっている。つまり、ある特定の状況をとくに混ざりあいが起きやすい状況として認識している。ハイルハンで1997年10月20日にh-Mからh-Gへ一部個体が混入したとき、マンダー氏の妻は、その前夜にh-Mにはトルガ家からの預託個体があったことに言及し、混ざりあいが起きたのは、放牧群の編成が変わって群れが不安定になっているからだという見解を述べた。放牧群の編成変化が混ざりあいの引き金になると考えられていることは、興味深い事実である。

次に、放牧群どうしが実際に混交した場合の人々の対応を、10月6日にh-Mとh-Gが混ざりあった事例をとおして記述する。h-Mとh-Gが10時37分に混ざりあうと、h-Mの牧童バターとh-Gの牧童オラーナはすぐさまこれを分離しようと決め、10時48分には最寄りの家畜囲いであるタンガー家の囲いに向かって群れを追い立て始めた。そこにはヒツジ・ヤギ、ウシ、ウマの囲いがあった。³³⁾分離作業は、タンガー家の囲いに到着した11時18分から13時40分まで、小休止時間を除いて2時間4分30秒かかった。その大部分は興奮して啼き叫び逃げまどうヒツジ・ヤギたちを走って追いかけ回すのに費やされ、身体的にも精神的にも辛い作業であった。

そのプロセスを具体的に示すと、11時18分、2人は興奮して走り回る全個体をまずヒツジ・ヤギの囲いに収め、そこからh-Mの個体を選んで囲いの外に出すことに決めた。そして11時33分、h-Mの約20頭を残してほかの全個体が囲いに入ったところで扉を閉じた。オラーナが囲いの中に入ってh-Mの個体だけを扉の方へ追い立てた。バターは囲いの扉を操作してh-Gの個体を押しとどめながら、h-Mの個体だけを外へ出した。彼らは1頭1頭個体を捕まえて顔を見ては誰の家畜かを判別していた。しかしながら、柵を跳び越えたり扉の隙間から走り出る個体が多かったため、囲い内部にはh-Gの個体が残ったが、囲いの外ではh-Mの全個体にh-Gの一部の個体が混ざっていた。そこで、囲いの外の個体の集まりからh-Gの個体を分離するため、これらをウシの囲いに収容してh-Gの個体のみを外に出すことにした。だがウシの囲いは開口部が多いためほとんどの個体が外に出てしまった。そこで彼らはヒツジ・ヤギの囲いを利用して作業をやり直すことにした。まずヒツジ・ヤギの囲いから先のh-Gの個体を出し、囲いの北側の斜面上方へ追いやった。次にヒツジ・ヤギの囲いに混合群を収

33) 分離作業の場所としてタンガー家の家畜囲いが選ばれたのは、キャンプへ戻るよりも近かったことのほかに、若い牧童たちが群れの混交を防げなかったことについての大人からの叱責を恐れたことが関係しているかもしれない。

め、h-G の個体のみを囲いの外に出した。囲いから出た h-G の個体は、斜面上方の h-G 群に合流し、囲いの中には h-M の個体のみが残された。こうして 13 時 40 分、分離作業が終わり、2 人は各自の放牧群を率いて両キャンプのある東へ向かった。

群れがキャンプに到達すると、2 つの居住集団の人々はそれぞれ相手の居住集団の放牧群を自分のキャンプの囲いに入れ、その中に自分の個体が残っていないか確認した。まず rg-M の人々がこの作業をおこない、次には rg-G がこれを繰り返した。そのさい、両方の居住集団の全成員がその場に立ち会って見守った。この過程で h-M の仔ヤギ 1 頭が h-G に混入していたことが判明した。このように、混交した群れを分離する作業には、この群れに関わるすべての人が緊張して長い時間を費やした。とくに、300m しか離れていない 2 つの居住集団の人々が、その日のうちに相手の群れに自分の家畜が残っていないか何度も念をおしてチェックする様子は印象的であった。

以上のように、マンダー氏らは混交した群れを一刻も早く分離しようとした。しかし先行研究では、日帰り放牧中に放牧群どうしが接触したり合流したりしても、自らもとの群れに分かれ、混ざりあうことはほとんどないと報告されてきた [太田 1982: 40-42; Shikano 1984: 67; 1990: 24; 谷 1997: 43]。マンダー氏らの放牧群も、ほうっておけば自らもとどおりに分かれる可能性はないのだろうか。

この点に関して、モンゴル牧民の見解はきわめてはっきりしている。つまり彼らは、ヒツジ・ヤギの放牧群どうしがいったん混ざりあってしまったら、時間が経つにつれて自発的にもとどおりに分かれるだろうなどはまったく期待しない。むしろ、混交して頭数がふくれあがって興奮した個体の集まりを放っておけば、小集団に分裂して迷子になったり、さらにまた別の放牧群と混ざりあったりする危険性があると考えているのである。それゆえ、混交に気づけばすぐさま駆けつけて群れの内部に入って介入するしかないのだ。さらにまた、モンゴル牧民は、ヒツジ・ヤギの放牧群どうしが混交したらその日のうちに自分の家畜をすべて取りもどすべきだと明確に意識している。デレン郡の牧民によればその理由は次のとおりである。1) 自分の家畜が他の居住集団の群れに混ざっていても、自分が尋ねない限り相手は知らせに来てはくれない。2) 他人は突然、遠方に移動するかもしれないので、他人の群れに混ざり込んだ自分の家畜はできるだけ早く回収しておく必要がある。³⁴⁾ 3) ヒツジやヤギは、ウシやウマと異なり、数年も経つと個体を見分けることが難しくなる、ということである。

34) 他世帯の群れに自分の家畜が混ざり込んだ場合、これが近くにキャンプしている間は聞き込みや直接確認が容易であるが、移動して数 10km 離れてしまうと発見が難しくなるという。

6. 群れを導く技術

6.1 牧童の統率行動

本節では、日帰り放牧中に群れを導く牧童の技術を分析する。筆者は 1997 年 10 月 5, 9, 20 日の 3 日間に rg-M でおこなわれた日帰り放牧中に牧童が群れに対しておこなった統率行動の時間と内容を 10 秒=1 単位として記録した。³⁵⁾

牧童の群れに対する統率行動の時間量を表 2 に示した。牧童が群れの統率のために費やした時間は、統率期間の 16.7~28.0%を、また統率期間と放任期間を含む 1 日の放牧時間から飲水と休憩の時間を除いた時間（これを「全放牧時間」とよぶ）の 23.0~26.0%を占めていた。ここで東アフリカの牧畜社会における調査結果を参照すると、太田はトゥルカナにおいて 2 人の少年が 198 頭のヤギからなる放牧群の前と後ろから協力して統率していた事例を 2 日間観察し、後ろの牧童の統率行動が全放牧時間³⁶⁾に占める割合が平均 7.9%であったことから、もしも牧童が 1 人であった場合に介入量が 2 倍になったとしても、日帰り放牧はわずかな介入によって成立していると指摘している [太田 1982: 36]。サンプルで調査をおこなった鹿野とカリモジョンで調査した波佐間も、放牧時間や統率行動の定義は異なるが、放牧中に牧童が群れに対しておこなう統率行動がきわめて少ないことを指摘している [Shikano 1990: 15; 鹿野 1999: 241-242; 波佐間 2002: 83]。これらを比較することは放牧環境等の違いのため難し

表 2 牧童が群れに対しておこなった統率行動

月日 (1997 年)	牧童	放牧群の 編成*	統率期間**		全放牧時間***	
			統率行動/全時間	割合	統率行動/全時間	割合
10 月 5 日	ハルザイ	M+H	461/2076	22.2%	781/3006	26.0%
10 月 9 日	ハルザイ	M+H	529/1890	28.0%	698/3030	23.0%
10 月 20 日****	バター	M+H+T	327/1962	16.7%		

統率行動量と全時間は、10 秒を 1 単位として示している。

* M はマンダー家の管理群, H はハルザイ家の管理群, T はトルガ家の管理群を表す。

** 統率期間とは、放牧開始から飲水・休憩までの、牧童が群れに随行して群れを統率する期間である。

*** 全放牧時間は、統率期間と放任期間を含む 1 日の放牧時間から、飲水と休憩の時間を除いた時間である。

**** この日、牧童が群れから離れたのは飲水開始から 6 分後だったため、統率期間には飲水時間の一部が含まれる。また牧童の帰宅後まもなく、そばを通りがかったゴンボ一家らの居住集団の放牧群と混ざりあい、群れをもとどおりに分けるためにすぐに人々が介入した。この後の介入は、群れの統率のためか分離のためか区別できなかったため、全放牧時間中の介入量は算出できなかった。

35) 牧童の統率行動の 1 回は、続く 10 秒間に介入が起こらず 10 秒以上のインターバルがあったとき、これを 1 回の統率行動の終了とみなした。統率行動の継続時間は秒単位で計測し、1 の位を四捨五入して 10 秒=1 単位として計算した。ただし 1 回の行動が 5 秒に満たない場合もこれを便宜的に 1 単位とした。

36) 太田は、群れの出発から帰着までの時間から給水と休憩の時間を除いてこれを「放牧時間」とよび、統率行動が「放牧時間」に占める割合を算出している [太田 1982: 36]。

いが、rg-M の日帰り放牧における統率行動は比較的多めである。

統率行動の時間的分布については、10 月 5 日のハルザイ氏の日帰り放牧の事例を図 7 に示した。放牧の開始後および飲水と休憩の開始後 30 分～1 時間には介入はないが、これらを除くと統率行動は全時間帯にまたがって多回数生起している。放牧開始と飲水の直後に介入がないのは、牧童がキャンプを出発するのがヒツジ・ヤギの出発の 30 分～1 時間後であり、飲水の開始とともに牧童は帰宅するためである。これに対してトゥルカナの場合、牧童の介入行動は集落からの出発後および帰着前の 30 分間と、飲水と休憩の前後 30 分間に集中し、その時間帯とそれ以外の時間帯との統率行動量には有意な差があったという [太田 1982: 36-37]。ハイルハンにおける日帰り放牧中の牧童の群れに対する統率行動は、統率期間中に限っても全放牧時間をとっても特定の時間帯に集中することなく、むしろ日帰り放牧の全時間とおおしてだらだらと生起している。

しかも、牧童が群れに随伴して群れの行動にこまめに介入を加えている間には、ヒツジ・ヤギはほかの放牧群が近接しても啼き声をあげたり、そちらへ接近したりすることはなく、静かに採食を続けるのが観察された。

次に、牧童の統率行動の種類と量、すなわち牧童の群れに対する介入がどのような行動から成り立っているのかを、10 月 20 日の牧童バターによる日帰り放牧の統率期間を事例として表 3 に示した。統率行動の種類を分類するさいには、群れに対する牧童の位置に注目し、牧童が群れを後ろから騎乗や徒歩で「追う」場合と、牧童が自分の位置を変えないで（「不動」）離れた場所から群れを操作する場合とに大きく分けた。牧童の統率行動の大部分（88.4%）は群れを追うことでなされていた。牧童は絶えず動き回りながら群れに介入しているのである。

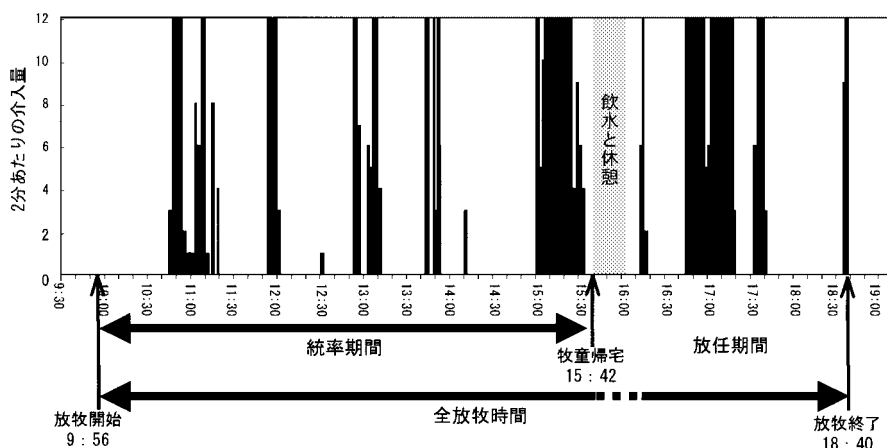


図7 牧童の統率行動の時間的分布

1997 年 10 月 5 日のハルザイの統率期間中、1 単位は 10 秒。

表3 牧童の統率行動の種類と量

統率行動の種類		統率行動の量	
牧童の位置	介入の技法	単位	割合 (%)
群れを追う	追う (+ α)*	289	88.4
不動	かけ声をかける	6	1.8
	モノを投げる	2	0.6
	座り込む	30	9.1
合計		327	100

1997年10月20日、バターの統率期間中、10秒が1単位。

*牧童が群れを追いながら、かけ声をかける、モノを投げるなどの行動が同時におこなわれる。

牧童は群れに対して、追うあるいは自分の位置を変えないで、といういずれかのポジションをとったうえでさらに、群れに向かって「かけ声をかける」、「モノを投げる」、群れの進行方向前方に「座り込む」などの行動をとっていた。「かけ声をかける」とは、ヒツジ・ヤギを追い立てたり呼び寄せたりする効果があるとされる「ターッチ！タッチ、タッチ…」および「チャー！」といったパターン化された音声や、群れを驚かせる即興の奇声（カラスの鳴き声のような「クワッ！クワッ、クワッ…」といった甲高い声など）を発したり、歌を歌ったり、歯笛で鋭い音を出したり旋律を吹いたりすることである。個体に対する呼びかけその他の意味のある言葉は使われなかった。「モノを投げる」のは、散開している群れに音声的・視覚的に働きかけても効果がないときで、路傍の乾燥した牛糞や石を群れの先頭に行く個体や逸脱しつつある個体に投げつけるのである。牧童が下馬して座り込むのはふつう休憩、喫煙、双眼鏡での周囲観察のためである。だが、群れが進もうとする方向に牧童が「座り込む」ことで群れの移動を抑制する場面も観察された。

牧童が群れを追う場合には、同時に、かけ声をかける、モノを投げる、牧童自身の腕を肩から大きく振り回したり、腕を身体にたたきつけて音を出す、あるいは乗用馬の手綱や乗用馬の尻をたたくためのタシヨール (*tashuur*) とよばれる延長物（約 20cm の棍棒に約 30cm の革紐がついている）を振り回す、といった行動が生じた。一方、牧童の位置が不動の場合には、かけ声をかける、あるいはモノを投げる、それに加えて座り込むことで群れの行動に影響を与える場面が観察された。

牧童の群れに対する介入行動の大部分は、牧童が動き回りながらなされていた。だからといって群れを絶えず移動させているわけではない。彼らは、群れの移動を抑制し、できるだけ1カ所にとどまらせることを目指している。牧童は、自分が動き回ることにより、群れをまとめ、よい草が豊富にある場所へ群れを導き、目的地に着いたら群れがそこで長時間とどまって採食するように群れを操作していた。

6.2 群れの行動とその制御

本節では群れの行動に注目し、日帰り放牧中の群れの行動と牧童の統率行動との関係について検討する。実際の日帰り放牧においてヒツジ・ヤギの群れがどのような行動をとっているのかを調べるために、10月5日と20日のh-Mの統率期間における群れの行動を1分単位で記録した。群れの状態は移動性の程度によって3つの行動相に分類した。すなわち最も移動性の高い状態が「移動相」、低い状態が「採食相」、その中間状態が「移動採食相」である(図8)。各相におけるヒツジ・ヤギの行動は以下のとおりである。³⁷⁾

「移動相」では、ほぼ全個体が密集した複数列の縦隊をつくり、ほとんど採食することなく早足で移動する。このような群れの行動をモンゴル語で「ツォワフ」(*tsuvakh*)という。移動相がみられるのは、群れの自律的な行動においてはキャンプ出発から1時間、そして飲水・休憩の後の再出発の時、加えてのんびりと採食している最中に突然なにかに驚いたかのように群れの全個体が走り出す場合である。牧童の介入下では、牧童が移動しながら連続的に群れに介入している時に現れ、介入の手を休めると群れの移動性は下がり、「移動採食相」か「採食相」に移行する。

「採食相」では、ヒツジ・ヤギは全体としてほとんど位置を変えずに「1カ所にとどまって」(*togtokh*)、「散開して採食する」(*tarch idekh*)。各個体は採食に没頭しており、散開した群れ

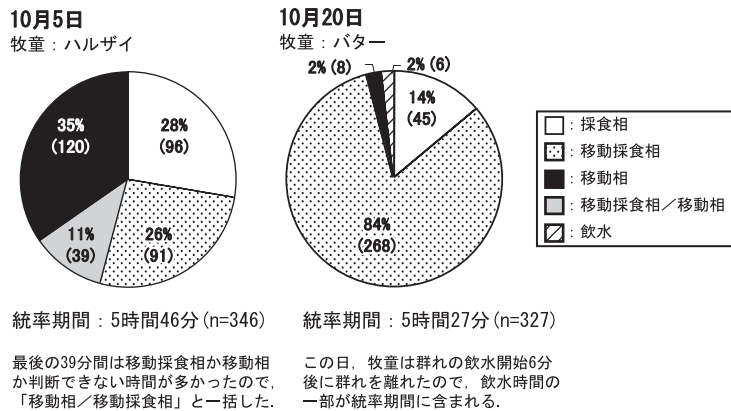


図8 統率期間における群れの活動状態
1単位は1分。

37) 群れの行動は連続的に変化するが、群れの行動相を判別するさいにはヤギの頭部の位置を指標とした。ヒツジはほぼ常に顔を地面に向けているが、ヤギは採食中のみ下を向き、食べていないときは顔をあげている。そこで、ヤギの顔が上を向いていると移動相であると判断した。ヤギの顔が下向きであれば群れは採食しているはずだが、移動している群れでは全個体の頭部が同じ方向を向いているのに対し、1カ所にとどまって採食する場合は各個体の頭と尻の方向はばらばらである。そこで前者は移動採食相、後者は採食相と判断した。

は一時的に地形によって二分されたり、きわめて低速の移動の中で先行部から後行部が遅れることがあったが、複数のサブグループに分かれて安定することはなかった。

「移動採食相」は移動相と採食相の移行期に現れる中間状態であるが、モンゴル語でこれを指示する語句はない。移動採食相の典型的な状態では、群れの全個体がほぼ横 1 列にならんで移動しながら採食する。個体間の距離は 1~3m で群れ全体の横幅は数 100m まで拡散し、中央部の進行速度は両端よりも早いために群れは弓形をなす。このように拡散した形状は、広い斜面以外の場所では谷や稜線によって分断されやすいので、間もなく牧童が介入して凝集させ、移動相か採食相に移行する。移動採食相は、群れの自律的な行動においてはしばしば採食相と交互に現れる。介入下では、牧童の群れに対する介入の強弱により移動相と採食相の交代の途中に現れる。

モンゴルではヒツジ・ヤギの放牧においては、「群れを一定の場所に定まらせ、落ち着かせ、とどまらせる」ことが肥育のために理想的な状態であると考えられている (5.2 参照)。これはすなわち採食相を多く確保することである。図 8 では、採食相が統率期間に占める割合は 10 月 5 日には 28%、20 日には 14% であり、ハルザイが担当した日に多い。移動相は、ハルザイの担当日には 35% を占めているが、バターの担当日にはわずかである。なおバターの統率した 20 日には移動採食相が大部分を占めている。

2 人の牧童を比較すると、ハルザイ氏のほうが経験豊富で、しかも世帯主として強い責任感をもって放牧にのぞんでいた。一方、バターはまだ少年で経験が少ない。マンダー氏とその妻は、彼にはまだ放牧の仕事を完全にこなすことができないと考えており頻繁に指示を出していた。バターは両親の言いつけに従って放牧に随行しているものの、孤独で退屈な牧童の仕事を嫌っていつも早く帰宅したがっていた。このような 2 人の放牧に対する日常の態度から推察すると、放牧時間の大部分を移動採食相が占める (10 月 20 日、バター担当) よりも、採食相の割合を十分に取り代わりに移動相も多く取る (10 月 5 日、ハルザイ担当) 方が、望ましく、熟練した統率のしかたであると考えられる。

次に、日帰り放牧中の群れの状態とその変化が、牧童の統率行動とどのような関係にあるのかを検討する。10 月 5 日の統率期間において、群れの行動相の変化に牧童の介入がいかに関与したかを図 9 に示した。牧童の統率行動は、群れの行動相の変化に及ぼした効果によって次の 2 つに分けた。すなわち、(A) 群れを移動させる：群れの行動相は移動採食相または採食相から、移動相に転換した。(B) 群れを一定の範囲に一定時間とどまらせる：群れの行動相が採食相または移動採食相であるときにそのいずれかの状態が継続した。ただし牧童が群れに介入したあと一時的に移動相が現れてもすぐに移動性が低下すれば、これを (B) の効果をねらった統率行動とみなした。

この日の介入開始から 24 分間と牧童の帰宅前の 40 分間を例として、牧童の統率行動と群

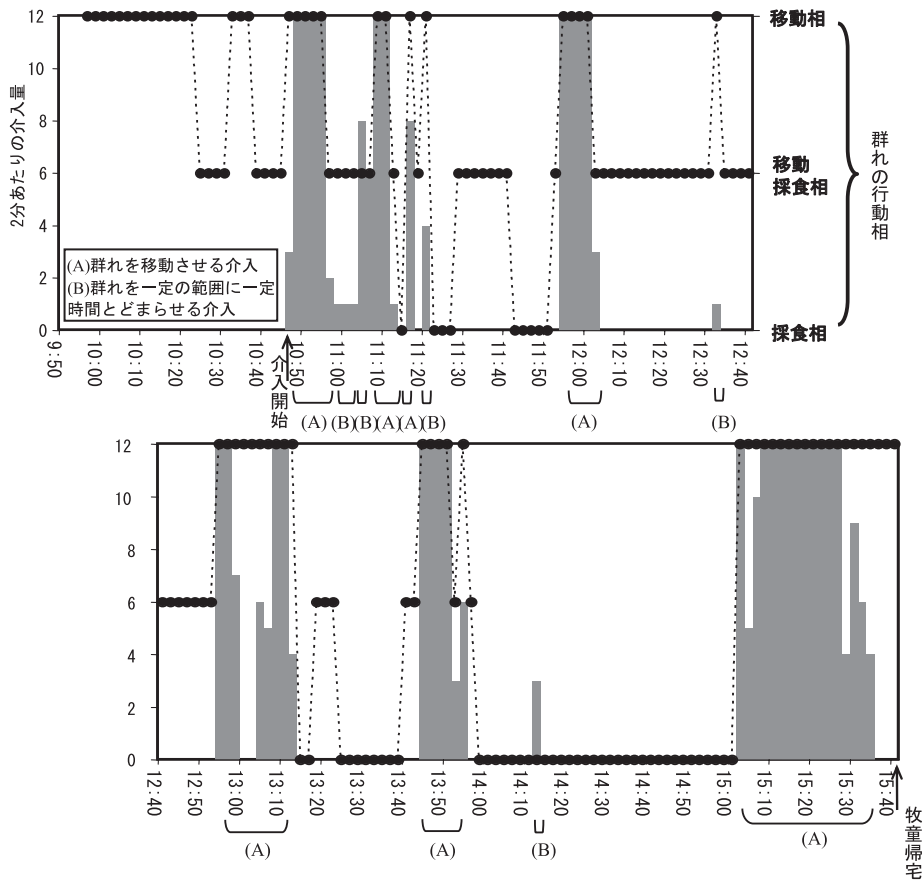


図9 群れの行動相の変化と牧童の統率行動
1997年10月5日のハルザイの統率期間中. 1単位は10秒.

れの行動相の変化を記述する。ヒツジ・ヤギが発射した 59 分後、牧童ハルザイ氏はかけ声をかけながら騎乗で群れに接近し、10 時 47 分から 57 分まで引き続き群れにかけ声をかけながら追い、群れを斜面上方へ北進させた (A)。斜面上方には rg-M のウマの群れがいて、ヒツジ・ヤギをウマの近くで一緒に放牧させるために移動させたのだった。10 時 58 分から 11 時 3 分にはハルザイ氏は下馬して地面に腰を下ろし、低速の移動採食相の状態にある群れの中で、早足で移動しようとする一部個体をみつけるたび 4 回にわたって声をかけ、群れの移動性が高まるのを抑制した (B)。11 時 5 分から 6 分には、ゆっくりと斜面を上がっていく群れを静かに徒歩で追うことにより、群れを凝集させた (B)。それでも群れは北西方向に拡散する徴候がみられたため、11 時 8 分から 14 分にハルザイ氏はこれを騎馬で追い立てて南東方向へ移動させた (A)。ここで群れは採食相になったが、11 時 16 分から 17 分にはハルザイ氏は下馬し

て静かに群れを追い、群れを南東、斜面下方のより適切な採食地へゆっくりと誘導した (A)。11 時 21 分、移動採食相で拡散傾向にあった群れを下馬したままで少し追って凝集させた後、逸脱しかけていた一部個体に対してかけ声をかけ、石を投げつけた。するとほかの個体も驚いて走ったので群れの移動性は一瞬高まったが、すぐに採食相になった (B)。

帰宅前の 15 時 2 分から 42 分までは、騎乗のハルザイ氏がヒツジ・ヤギの群れを仔ウシやウマの群れとともに、キャンプの南西 150m の水辺へとひたすら追い立てた (A)。これはハルザイ氏によれば、「ヒツジ・ヤギは朝から採食して午後 2 時過ぎ頃に満腹になる。満腹になると歩かなくなるので、その頃、キャンプ近くの飲水場へと連れて行く」過程である。

空腹のヒツジ・ヤギは、追い立てられても牧童の目を盗んでは立ち止まって採食したり、採食に夢中になって群れから離れる個体がいるため、群れは牧童の意図と異なる方向へ進んだり、拡散したりする。一方、草の悪いところで群れを無理にとどめようとすれば草を求めて歩き出して移動採食相になってしまう。適切な牧地においてのみ群れを採食相の状態に保つことができるのである。そのためにはまず草の豊富な場所に群れを導くことが必要である。

図 9 からは、一見、群れの移動性は牧童が介入しないと勝手に低下するようにみえる。だがこれは、ハルザイ氏が (A)(B) 両方の統率行動を使い分けることで実現されているのである。牧童が朝、その日に利用する採食場を適切に選び、群れをそこまで効率よく移動させて連れて行くことではじめて、ヒツジ・ヤギはそのよい草の豊富にある場所でとどまって採食するのである。牧童はそこで群れに適宜介入して群れの移動性を抑える。だが、群れの移動性がある程度高まった時、そこには草がなくなると判断して次のポイントへと決然と移動させる。このように、群れの移動をきちんと導くことによって採食相は実現されるのである。

次に、牧童のどのような統率行動が群れの行動にどのような効果を与えているのかを検討するため、10 月 20 日の統率期間における牧童の統率行動を分析する (表 4)。牧童の行動が

表 4 統率行動の種類と群れの行動に与えた効果

統率行動の種類*	群れの行動に与えた効果						合計
	進行方向		移動速度		まとめり		
	単位	割合 (%)	単位	割合 (%)	単位	割合 (%)	
牧童は群れを追う (+α)	126	97.7	46	97.9	117	77.8	289
牧童の位置は不動 (+β)	3	2.3	1	2.1	34	22.2	38
かけ声をかける	3		1		2		6
モノを投げる	0		0		2		2
座り込む	0		0		30		30
合計	129 (39.2%)		47 (14.3%)		151 (46.5%)		327

1997 年 10 月 20 日、バター-の統率期間中、10 秒が 1 単位。

*牧童が群れを追う場合は、かけ声をかける、モノを投げる、その他の行動が伴い、牧童が不動の場合はそれらに加えて群れの進路に座り込むという行動が伴った。

群れの行動に与えた効果は、「進行方向」、「移動速度」、「まとまり」の 3 つに分類した。群れの「進行方向」の調整は、群れが移動相または移動採食相であるときに進行方向を変えるものである。これは先頭に行く一部個体に集中的に牧童が介入することで達成された。「移動速度」の調整とは、群れの行動相を転換させることである。この場合、介入は群れ全体に対してまんべんなくおこなわれた。群れの「まとまり」の調整とは、採食相または移動採食相の群れが拡散し過ぎたときに凝集させることと、一部個体の動きによって群れが移動相に転換しそうな時に転換を抑止することである。³⁸⁾

表 4 からは、牧童の統率行動の時間量の 46.5%は群れのまとまりを操作することに向けられており、群れのまとまりを維持するためにはかなりの介入が必要であることがわかる。統率行動の種類との関係に注目すると、進行方向と移動速度は、それぞれ 97.7%および 97.9%が、牧童が群れを追う統率行動、すなわち多量の運動を要求される介入によって操作されている。一方、群れのまとまりに関しては、牧童が座ったままで群れに遠方からかけ声をかけたり、モノを投げたりするだけである程度は (22.2%) これをコントロールすることが可能となっている。ハイルハンでは東アフリカでの先行研究と比べて牧童の介入量が多く、とくに進行方向と移動速度をコントロールするために牧童は走り回らなければならないのであるが、群れのまとまりの維持においては、牧童の指示に対して家畜が阿吽の呼吸で応えているかのような場面がみられ、鹿野のいう「人間と家畜のコミュニケーション」が成立していると思われる [鹿野 1999: 71]。

本節をまとめると、ハイルハンのヒツジ・ヤギ放牧群は、いつ、どこで、何をするかを牧童により操作され、放牧ルートとリズムをコントロールされていた。それは具体的には牧童が、群れのまとまりや進行方向、移動速度を調整することで実現されていた。牧童は、多様な介入技法とその組み合わせをもち、群れの状態と介入の意図にあわせてそれらを繰り出している。

6.3 乗用馬の利用

ハイルハンでは、ヒツジ・ヤギの日帰り放牧に随伴する牧童は一般に、移動手段として乗用馬を利用していた。ヒツジ・ヤギは移動相のときには急勾配の斜面を平均時速 4~5 km で登坂するので、とくに多くの狭い谷を含む秋の放牧地では乗用馬を利用することで牧童の身体への負担は格段に軽くなっていた。統率行動の多くも騎乗でおこなわれた。しかし、牧童がわざわざ下馬して徒歩の状態でも介入することも少なくなかった。

牧童がどんな場合に徒歩あるいは騎乗で介入をおこなうのかを示す例として、10 月 20 日の統率期間に牧童が統率行動をおこなったさいの移動手段と、その統率行動が群れの行動に与

38) 母子関係にあるヤギ数頭が群れから遅れることがあったが、自ら群れに追いついて戻ることがほとんどで、牧童が介入することは稀であった。

表 5 徒歩と騎乗での統率効果

牧童の 移動手段	全統率行動		群れの行動に与えた効果					
			進行方向		移動速度		まとめり	
	単位	割合 (%)	単位	割合 (%)	単位	割合 (%)	単位	割合 (%)
徒 歩	122	37.3	26	20.2	1	2.1	95	62.9
騎 乗	205	62.7	103	79.8	46	97.9	56	37.1
合 計	327		129		47		151	

1997年10月20日、バターの統率期間中、10秒が1単位。

えた効果を表 5 に示した。この表からわかるのはまず、牧童は移動手段として乗用馬を利用しているにも関わらず、実際に群れに対して介入をおこなうさい、その 37.3%を下馬して徒歩の状態でおこなっていることである。なかでも群れのまとめりを調整するときには徒歩が 62.9%を占め、騎乗をはるかに上まわっている。一方で、移動速度のコントロールにさいしてはその 97.9%が騎乗でなされている。つまり、群れの移動に関しては騎乗での統率で対処できる場面が多いが、群れの統合を維持するためには牧童は何度もウマから降りては徒歩の状態ヒツジ・ヤギに向かう必要がある。

その理由は、騎乗あるいは徒歩の状態の牧童にとって可能な統率行動の種類と、それぞれの統率行動に対する群れの反応との対応関係を検討することで明らかになる。すなわち、騎乗で可能なのは、上半身の動きやかけ声をともないつつ群れを追う介入のみである。徒歩になると、片手はウマの手綱を引くために動きが制限されるものの、全身を使ったより多様でインパクトの強い介入ができる。たとえば両足で地面を踏みならしながら群れを追う、地面から牛糞などを拾って群れに投げつける、あるいは地面に座り込んで群れに圧力をかけるなどの介入である。牧童が騎乗であるか徒歩であるかによってヒツジ・ヤギの行動に及ぼす影響の違いは、端的に逃走距離に現れる。状況にもよるが、採食中のヒツジ・ヤギの中には牧童が騎乗であると 1m まで接近しても移動しない個体もある。だが牧童が徒歩の場合には、たとえ静かに接近してもほとんどのヒツジ・ヤギは早々に逃げ、牧童と群れの距離は 20m 以上に保たれた。実際、空腹時に散開して採食しているヒツジ・ヤギを移動させるために、騎乗の牧童が群れを追い立てても反応はにぶかった。彼らは牧童をちらりと見やったり一瞬歩みを早めるものの、すぐまた立ち止まって採食を始めた。しかし牧童が下馬して徒歩で介入を始めるとヒツジ・ヤギはたちまち牧童の統率に従ったのである。

7. 考 察

7.1 放牧労働の合理化と寄せ集めの放牧群

ハイルハンにおけるヒツジ・ヤギ放牧群は、人々が放牧労働を合理化した結果、その編成が

数週間から数ヵ月ごとに変化していた。

放牧労働の合理化とは、複数の世帯が協同して日帰り放牧の労働を分業することである。その方法としては、(1) 居住集団による家畜の共同管理：複数の世帯が近接してゲルを建てて居住集団を形成し、それぞれの「管理群」を種類ごとにまとめてひとつの放牧群として編成し、放牧にかかる労働を当番制によって分業する。(2) 群れ単位での家畜の預受託：親しい関係にある牧畜世帯の間では、子どもの教育などの社会的な事情や労働の合理化のために数週間から数ヵ月間、相互扶助として家畜の群れを預受託する、ということがみられた。

では、(1) の居住集団による家畜の共同管理は、どのようにして放牧群の編成変化を引き起こすのだろうか。ハイルハンでは、居住集団は 1~7 世帯が一時的に集まったものであり、その編成は数週間から数ヵ月の短い時間で変化した。その背景として、まず移動の決定権が各世帯にあることがあげられる。どの世帯と共に居住集団を形成するかは、双系的な親族モラルのもとで、居住規制を受けることなく、各世帯が選択・決定する。さらに居住地の選択肢には、子どもの通学などの社会的な事情に対応するため、草原だけでなく定住区も含まれる。このような理由で、居住集団の編成は短期的な時間幅でダイナミックに変化していた。なお、1930 年代にチョロト郡の隣接地域を調査したシムコフ [Simukov 1933: 26] も当該地域における居住集団の流動性の高さを強調している。このような居住集団の編成の流動性は、モンゴル国内でも、草原地域および砂漠性草原地域と比べて、とくに森林性草原（ハンガイ）地域で特徴的であるように思われる。

一般に草原や砂漠性草原では、森林性草原と比べてひとつの居住集団を構成する世帯の数が少ない [Bold 1996: 81]。たとえば草原に属するドルノト県バヤンドン郡では 2002 年には居住集団の多くが 1~2 世帯からなり [風戸 2003: 55]、砂漠性草原であるドンドゴビ県デレン郡における 2001 年秋の観察でも 1~3 世帯からなる居住集団が多かった。その理由のひとつとして、草原や砂漠性草原では多数の家畜を所有する世帯が比較的多いことがあげられる。家畜、とりわけヒツジ・ヤギの頭数が数百頭にのぼる世帯どうしが家畜をひとつにまとめて放牧することは、肥育効率の悪化などの悪影響を懸念して避けられるため、居住集団をともに構成する世帯の選択肢は限られる。³⁹⁾

とはいえ、草原や砂漠性草原を含めたモンゴル全域において居住集団の編成には流動性が認められる。なぜなら、牧畜に関わる労働の内容が季節によって異なるために居住集団の規模は季節的に変化するし [日野 2001: 117]、また子どもの通学のための居所調整といった社会的な必要もある [風戸 2002: 60-62]。長期的にみれば、世帯の発展サイクルにおける家畜頭数

39) 日野の調査したトゥブ県ブレン郡では世帯による家畜所有頭数の差が大きい。ここでは少数所有者は、多数所有者と一緒にキャンプすると自分の家畜の肥育に支障をきたしたり、労働の負担が増えるという嫌いと報告している [日野 2001: 116]。

や労働力の変化との関連で居住集団の編成も変化することが指摘されている。⁴⁰⁾

ここで、居住集団内部の世帯間関係を、放牧労働の分業が当番制でおこなわれる点に着目して経済的な側面から検討する。ハイルハンでは、比較的規模の大きい居住集団が形成され、そこでこのシステムが機能していたが、これが可能になったのはどの世帯もおしなべて家畜頭数が少なかったからである。居住集団における当番制による分業は、原則として各世帯の個別の事情や家畜頭数によって労働負担を肩代わりしたり免除したりすることなく、厳密に互酬のかつ短期的におこなわれる労働交換であった。このことは、ある世帯が当番にあたる日に都合が悪い場合、とくに世帯数が多い居住集団では、当番を1回免除してもらってシステム全体に負担を転化するのではなく、特定の他世帯との私的交渉をへて当番日を交替していたことからもうかがえる。また、ヒツジ・ヤギの頭数が少ない世帯は、これを居住集団外の近親に預託して、放牧当番に組み込まれることを回避していた。

これまで現代モンゴル国の居住集団の基盤となる世帯間関係については、多数の家畜を所有する世帯に家畜頭数の少ない世帯が随伴して労働を提供することによって代償を得るという経済的従属や [Bold 1996: 77-79; 尾崎 1997: 96], 親族のモラルにもとづいて若い世帯が年長親族に労働奉仕するケース [日野 2001: 120] が指摘されてきた。これに対して、ハイルハンにおいて放牧労働を当番制によって分業する世帯間の関係は、原則として家畜頭数がほぼ均等であるという経済的土台の上に成り立つ対等性を基盤としていた。

次に、(2) の家畜を預受託することが、どのようにして放牧群の編成を流動化させるかを検討する。ヨーロッパの都市に従属する周縁的牧畜地域などにおいては、無産の雇われ牧夫と、都市部に住む多数の家畜を所有する不在所有者との非対称な関係が古くから発達してきたことが報告されている [谷 1977: 125]。これに対して体制変化以降のモンゴルでは、家畜の預受託は親族など親しい社会関係にある者の間でおこなわれ、定住区に住む預託者は適宜、受託者を訪問して家畜管理作業に参加し、預託者が受託者に提供する金品は贈与とみなされることから、制度的経済関係の外部にあるとされてきた [Fernández-Giménez 1999; Sneath 1999a: 143]。⁴¹⁾ ハイルハンでも上記の傾向は認められた。だがここで注目すべきなのは、ハイルハン

40) 日野 [2001: 119] によれば、ある世帯が所有する家畜の頭数は一般に、夫婦が若いときには少なく、中年で多く、老年では次世代に分与する結果再び少なくなる。そして、家畜頭数や世帯内労働力の変動により家畜の共同管理パートナーに求めるものも変化するため、居住集団の編成も変わる。

41) Fernández-Giménez [1999] は、1994～95年のバヤンホンゴル県における家畜の預受託のあり方を詳述したうえで、この実践は革命以前の慣習に由来し、移行期の諸変化に人々が対応する有効な手段として機能していると指摘している。

ただし例外もある。たとえばドルノト県バヤンドン郡では、社会主義期の牧畜協同組合を継承した地元の会社組織と牧民との間で、牧畜生産の請負契約が2000年までおこなわれていた [風戸 2003: 56-57]。また、首都近郊のトップ県とドンドゴビ県では1990年代後半に首都の法人組織と牧民の間での労使契約による家畜預受託がみられた。預受託関係の多様な展開を、市場経済の浸透との関係で解明していくことは今後の課題である。

ではすべての牧畜世帯が家畜の預託者にも受託者にもなりうるばかりか、預託者と受託者はその役割りを交代することがあること、そして、預託者は定住区の住人に限られず草原の牧畜世帯も預託者になることである。ハイルハンの牧民は互いに、旅行や病気治療また子どもの教育といった社会生活上のさまざまな状況変化に対応するために、数週間から数ヵ月だけ家畜を群れごとほかの世帯に預託することがよくあった。そしてこのことにより、放牧群の編成は頻繁に変化するのであった。

以上をまとめると、人々は放牧にかかる労働を当番制によって分業したり、あるいは生業上の必要とは関係ない社会的な事情に対応するために、放牧労働の省力化を図っていた。すなわち居住集団をつくって家畜を共同で放牧したり、世帯間で家畜を預受託するのである。ただしこれらの協業関係は、各世帯内部の短期的な状況変化に応じて一時的に組織されるものであった。というのもハイルハンでは、家畜の放牧管理といった生産の面では世帯間の協同が不可欠である一方、家畜の所有・消費および居住地選択においては世帯の自律性が強かったからである。その結果、群れの編成は短期的・状況的に組み替えられることになり、放牧群のメンバーは寄せ集めのものとなっていた。これはすなわち、日常的な日帰り放牧場面で一群として放牧される家畜群の単位（放牧群）と、恒常的にひとつの世帯によって所有・管理されている家畜群の単位（管理群）が一致しないということであった。

7.2 世話のやける放牧群と群れを導く独自の技術

以上のような経緯で、ひとつの放牧群として編成される複数の管理群の組み合わせは頻繁に変化した。そして新しく編成された放牧群の内部では、顔見知りでない個体どうしが一緒にされるばかりか、前日までは混ざらないよう分離されていた個体どうしがある日を境に統合の対象となる。つまり、新規に編成された個体たちは日帰り放牧中にひとつの放牧群として行動を同調させるように人間から圧力をかけられるのであるが、居住集団の構成が変われば再び混ざりあってはならない別の群れに属するものとして分離の圧力がかけられるのである。そしてハイルハンの牧民自身、放牧群の編成変化が群れを不安定にしており、放牧群どうしの混ざり合いの原因となると考えている。

実際モンゴルでは、放牧中の放牧群が頻繁にほかの放牧群と混ざりあうという現象がみられた。これは、安定した群れ編成を前提として、囲いを共にする群れ、放牧を共にする群れといったさまざまなレベルにおいて家畜の群れに「輪郭」を発見してきた東アフリカにおける先行研究 [太田 1982; 1995; Shikano 1984; 1990; 鹿野 1999; 波佐間 2002] の結果とは異なる。

日帰り放牧中の牧童の群れに対する統率行動に着目すると、東アフリカにおいては出発・帰宅の前後 30 分間といった特定の時間帯に牧童の介入が集中するほかは [太田 1982: 36-37]、わずかな介入のみで容易に放牧が成立していたが [太田 1982: 36; Shikano 1990: 15; 鹿野 1999: 241-242; 波佐間 2002: 83]、ハイルハンでは牧童の統率行動の量は先行研究と比べて多

く、統率行動の時間的分布には集中する時間帯がなく、一日の放牧時間をとおして絶え間なく生起していた。

ただし牧童の介入行動は、必ずしもその場その場の状況に対応した技術的・実地的な必要性だけによって生起しているわけではなく、家畜観や放牧理念といった文化的な信念や知識に支えられている側面がある。モンゴルの牧民たちは「頼りない家畜」という観念をもっており、これが牧童の群れ統率行動を理念的に支えている。また彼らは「ホニ・ニーレフ」という言葉を口に出すことすらいやがるほど、ヒツジ・ヤギの群れが混ざりあうことを嫌い、自分の個体が他人の群れに混ざり込んだ状態で時間が経ち、回収できなくなって家畜を失うことを恐れている。このような文化的な認識があるために、放牧中の家畜群に対する牧童の介入は、群れの統率のために必要な量を越えて過剰になることもあると考えられる。

とはいえハイルハンにおいては、日帰り放牧を問題なく遂行するためには多量かつ絶え間ない介入が必要なのであった。というのも、牧童が群れを離れるとすぐに群れは分裂したり、ほかの群れと混ざりあったりし、反対に、牧童が群れに随伴して群れの行動にこまめに介入を加えていると、ほかの放牧群が近くにいても混ざりあわなかった。

ここで、ハイルハンの日帰り放牧の状況をヒツジ・ヤギの視点からみると次のようになる。群れのメンバーシップは数週間から数ヶ月ごとに変わり、放牧群編成が変わったときには見知らぬ個体と強制的に一緒にされる。そして群れを導く牧童は、当番制によって基本的に毎日代わるうえに、居住集団の編成が変化すると見知らぬ人間がこれに加わる。⁴²⁾ ハイルハンではこのような状況下で日帰り放牧が成立していた。同じように日帰り放牧をしているといっても、東アフリカとモンゴルでは、放牧群の内部の個体間関係や、放牧群と牧童の関係はまったく異なっていると考えられる。

最後に、日帰り放牧における乗用馬の利用について若干の検討を加えたい。これまで家畜の放牧管理を扱った人類学的な研究は、対象社会として騎馬遊牧社会をカバーしてこなかった。考古学では、ユーラシアにおけるウマの騎乗利用のインパクトについて興味深い示唆がなされている。すなわち、移動・狩猟・戦闘への利用に続き [Anthony 1986: 302]、放牧への乗用馬の利用が大規模な家畜群の維持を可能にし、その結果、遊動的な牧畜生活が誕生したというのである [川又 1994: 153]。

ハイルハン事例からは、家畜の放牧管理における乗用馬の利用の具体的な影響を2点指摘できる。第1に、牧童は乗用馬の機動力を利用することにより移動速度と移動範囲を徒歩の場合と比べて格段に高めていた。その結果、複数種類の別々に分離して放牧すべき放牧群を

42) 松井 [2001] も、西南アジア牧畜社会を事例として、家畜の管理が被雇用労働力によっておこなわれ、ひとつの群れを導く牧童が契約のために半年や1年の短期で交代する条件下では、牧童の出すサインがヒツジに理解されにくいだろうと述べている。

1 人の牧童が管理することが可能になっていた。第 2 に、牧童は騎乗であることにより群れに至近距離まで近接したり、群れ内部に分け入ることができるのに加えて、高見から群れ全体を見渡すことができた。放牧中のヒツジ・ヤギは、牧童が徒歩で近づくと、その距離が 20m ほどになるとさっと移動して距離を保つが、牧童が騎乗である場合には 1m 以上まで近接するのを許していた。このことは、騎乗の牧童が群れを追っても徒歩での場合と比べて群れの反応にはぶく、音声などによる副次的介入をしなげらなかつたことと表裏をなしている。また、群れに働きかけるために牧童が駆使できる身体技法が騎乗と徒歩では異なっていた。日帰り放牧に乗用馬を利用することは、牧童とヒツジ・ヤギ放牧群との関係そのものを変容させている可能性がうかがわれるが、その意味の探求は今後の課題である。

ところで、ハイルハンの牧童の群れ統率技術の特徴について検討するさいには季節性を考慮する必要があるだろう。日帰り放牧の方法には微細な季節的差異があり、放牧地の地形も異なるからである。ハイルハンでは、1 年のうち夏営地にいる 2~3 ヶ月間の日帰り放牧では、基本的に家畜が好きな場所で好きなリズムで採食し、牧童は群れのまとまりと移動・採食の範囲をコントロールするために随時介入するという放任的な方法が主である。それ以外の秋から春にかけての日帰り放牧では、群れのまとまりの維持のほか、家畜がいつ、どこで、どのような草を食べ、いつ、どこで飲水と休憩をするかのすべてが牧童の計画とコントロールのもとにおかれる傾向が強い。とくに本論文において牧童による群れ統率技術の分析をおこなった秋期は、来るべき厳しい冬と春に備えて家畜に脂肪をつけさせる時期と考えられていた。⁴³⁾ このため人々は、ヒツジ・ヤギを肥育するために労働力の許す限り時間をかけて低速で長い距離を放牧させるよう努力をしていた。また夏のオープンな放牧地と、秋から春の狭い谷の中にとられた放牧ルートという、地理条件の差異も牧童の統率方法に影響を与えているだろう。こうした放牧方法の季節的差異の解明は今後の課題である。

モンゴルでは放牧に関わるさまざまな要因、すなわち牧童の熟練度、季節、放牧地の地形、群れの規模に関わらず放牧群どうしの混ざりあい起きており、その原因のひとつとして変わりやすい群れ編成に注目することができる。ハイルハンのヒツジ・ヤギ放牧群は寄せ集めの個体の集まりなのであり、これには群れとしての「輪郭」がみられず、放牧中の移動においても自律性は発揮されない。つまり、先行研究が指摘してきたこれら 2 つの「家畜らしさ」の特徴に欠けるのである。そのため牧童は、当番制により数日に 1 度だけとなった日帰り放牧の分担の日には、労働集約的に絶え間なく統率し続けることで辛抱強くつきあうのである。このように、頼りなく世話のやけるヒツジ・ヤギを騎乗の牧童が機動力にものをいわせて力づく

43) モンゴルの草地では、秋から春にかけて草量が減少するうえ、牧草の単位量あたりのエネルギー量も減少する [三秋 1980: 31-34]。家畜の体重も季節的に変化し、もっとも低下する春には秋のピーク時の 20~30%減となるとの報告がある [山崎・宮崎 1992: 45]。

でコントロールするという放牧のあり方は、従来の人間一家畜関係に関する研究と比較すると洗練されていないと断じられるかもしれない。だがハイルハンの牧民の秋営地での放牧実践からは、彼らが自分のヒツジ・ヤギをオオカミや泥棒から守り、ほかの群れとの混ざりあい避けながら、厳しい冬を生き抜けるだけの体脂肪をつけさせるような肥育をおこなうという意図を明確にもって、日帰り放牧をデザインし、実行していることがわかった。放牧理念としても、群れの移動性を抑えて、ひとところにとどまらせて採食させることの重要性が、モンゴルでは歴史・地域を越えて認識されている。そしてハイルハンの牧童は放牧群に対して、比較的多量の介入を絶え間なくおこなうことで、群れのまとまりを保ち、群れの行動と移動のルート・リズムをコントロールしていた。このようにモンゴル牧畜社会には、独自の家畜管理理念、信念や知識、そして乗用馬の利用を含めた放牧技術が発達していることが明らかになった。また、そこで展開されている人間一家畜関係は、モンゴルの社会環境を背景として、牧民と家畜の間で毎日繰り返されてきた放牧実践の結果として今、ある。以上から、日帰り放牧を例として牧畜における人間と家畜の関係の多様性が示された。

謝 辞

本研究は、平和中島財団奨学金（1997～1998年）、日本学術振興会の特別研究員奨励費（2000～2003年）の助成のもと、モンゴル国立大学社会科学部人類学・考古学研究室に研究生として受け入れられ、同研究室主任教授の Dr. D. Tu'men 氏と技官の B. Undral 氏の協力を受けて可能となった。ハイルハンでは、Gomboo 氏、Otgoo 氏、Mandaa 氏、Dashjoo 氏、Dembee 氏をはじめとする多くの方々が寛容に私を受け入れて下さった。また、京都大学の菅原和孝先生、太田至先生、国立民族学博物館の小長谷有紀先生、ルハグワスレン先生のご指導とご協力を賜った。以上、ここに記して、心からお礼を申し上げます。

引用文献

- Anthony, D. 1986. The "Kurgan Culture," Indo-European Origins, and the Domestication of the Horse: A Reconsideration, *Current Anthropology* 27 (4): 291-314.
- Arkhangai Aimgiin Chuluut Sum. 1993. *Taniltsuulga*. (アルハンガイ県チョロート郡. 1993. 『概要紹介』 出版所不明)
- バヤン・ハイルハン行政区作成の統計資料（未公開）.
- Bold, B. 1996. Socio-economic segmentation-Khot-Ail in nomadic livestock keeping of Mongolia, *Nomadic Peoples* 39: 69-86.
- Darl, G. and Hjort, A. 1976. *Pastoral Herd Growth and Household Economy*. Stockholm: Department of Anthropology, University of Stockholm.
- Fernández-Giménez, M. E. 1999. Reconsidering the Role of Absentee Herd Owners: A View from Mongolia, *Human Ecology* 27 (1): 1-27.
- 後藤富男. 1970. 『騎馬遊牧民』 近藤出版社.
- 萩原 守. 1999. 「ト・ワンの教えー19世紀ハルハ・モンゴルにおける遊牧生活の教訓書ー」『国立民族学博物館研究報告別冊』 20: 213-285.

- 波佐間逸博. 2002. 「家畜ヤギが形成する『輪郭のある群れ』と放牧管理—ウガンダ東部のカリモジョン社会の事例から—」『動物考古学』19: 73-91.
- 日野千草. 2001. 「モンゴル遊牧地域における宿营地集団—モンゴル国中央県ブレン郡における事例から—」『リトルワールド研究報告』17: 89-125.
- 今西錦司. 1972. 『動物の社会』思索社.
- 稲村哲也・古川 彰・結城史隆・渡辺道斉・O. スフバートル. 2001. 「市場経済化過程におけるゴビ地方遊牧社会の現状と社会・経済変動」『リトルワールド研究報告』17: 127-139.
- 川又正智. 1994. 『ウマ駆ける古代アジア』講談社.
- 風戸真理. 1999. 「遊牧民と自然と家族—遊動と家畜管理—」島崎美代子・長沢孝司編『モンゴルの家族とコミュニティ開発』日本経済評論社, 21-50.
- _____. 2002. 「モンゴル国の地方に暮らす人々の遊牧と定住をめぐる移動と世帯間協力: ドンドゴビ県デレン郡の一家族の生活史を中心に」『リトルワールド研究報告』18: 49-77.
- _____. 2003. 「市場経済へ移行する社会における地方に暮らす人々の適応実践—モンゴル国ドルノト県バヤンドン郡の牧畜制度と教育制度の事例より—」『モンゴル研究』21: 47-66.
- Kazato, M. 2005. What is the *O'voljoo* for Mongolian herders?: The Right to Land in Pastoral Regions in Postsocialist Mongolia. In Kozo Hiramatsu ed., *Coexistence with Nature in a 'Glocalizing' World—Field Science Perspectives—*. Kyoto: Kyoto University, pp. 239-246.
- 小長谷有紀. 1991. 『モンゴルの春』河出書房新社.
- _____. 1996. 『モンゴル草原の生活世界』朝日新聞社.
- _____, 編著. 2002. 『遊牧がモンゴル経済を変える日』朝日新聞社.
- 松井 健. 1989. 『セミ・ドメスティケーション』海鳴社.
- _____. 2001. 『遊牧という文化』吉川弘文館.
- 三秋 尚. 1980. 「モンゴル草原の植生と牧地の利用」『モンゴル研究』11: 28-38.
- National Statistical Office of Mongolia. 1996. *Mongolian Statistical Yearbook 1995*. Ulaanbaatar: National Statistical Office of Mongolia.
- 太田 至. 1980. 「トゥルカナ族の家畜所有集団と遊動集団」『アフリカ研究』19: 63-81.
- _____. 1982. 「牧畜民による家畜放牧の成立機構—トゥルカナ族のヤギ放牧の事例より—」『季刊人類学』13 (4): 18-60.
- _____. 1995. 「家畜の群れ管理における『自然』と『文化』の接点」福井勝義編『講座・地球に生きる [4]』雄山閣, 193-223.
- 尾崎孝宏. 1997. 「現代におけるホトアイルの動態」『日本モンゴル学会紀要』28: 83-98.
- Shikano, K. 1984. On the Stability of the Goat Herd in the Pastoral Samburu, *African Study Monographs, Supplementary Issue 3*: 59-69.
- _____. 1990. A Comparative Study of the Herd Structure between the Feral Ogasawara Goats and the Domestic Samburu Goats, *African Study Monographs, Supplementary Issue 12*: 1-33.
- 鹿野一厚. 1999. 「人間と家畜の相互作用からみた日帰り放牧の成立機構—北ケニアの牧畜民サンプルにおけるヤギ放牧の事例から—」『民族学研究』64 (1): 58-74.
- Simukov, A. D. 1933. Hotoni, *Sovremennaya Mongoliya* 3: 19-32.
- Sneath, D. 1999a. Kinship, Networks and Residence. In Caroline Humphrey and David Sneath eds., *The End of Nomadism*. Durham: Duke University Press, pp. 136-178.
- _____. 1999b. Spatial Mobility and Inner Asian Pastoralism. In Caroline Humphrey and David Sneath eds., *The End of Nomadism*. Durham: Duke University Press, pp. 218-277.

- 谷 泰. 1976. 「牧畜文化考—牧夫—牧畜関係行動とそのメタファー—」『人文学報』42: 1-58.
- _____. 1977. 「イタリア中部山村移牧羊の管理について—主にアブルツォ・チェルクエト村調査より—」会田雄次・梅棹忠夫編『ヨーロッパの社会と文化』京都大学人文科学研究所, 117-167.
- _____. 1997. 『人・神・家畜』平凡社.
- Ulsyn Geodezi, Zurag Zu'in Gazar (BNMAU-yn Ulsyn Barilgyn Khoroonoy Khar'yaa). 1987. *Arkhantai aimgiin atlas*. Ulaanbaatar. (国立測地・地図局 (モンゴル人民共和国建設委員会附属). 1987. 『アルハンガイ県地図帳』ウランバートル市)
- ヴリーランド. 1962 (1957). 「西北蒙古ナロバンチン寺領における遊牧モンゴルの経済・社会生活 (上)」愛宕松男訳, 1962 年文部省科学研究費による総合研究・遊牧社会研究グループ『遊牧社会探究』16: 1-32.
- 山崎正史・宮崎 昭. 1992. 「モンゴル人民共和国における草地利用型牧畜技術に関する研究」『日本草地学会近畿中国支部会報』21: 43-50.